





心の糧

十二使徒評議員

マリオン G. ロムニー

1 831年、主は次の指示をお与えになった。「……シオンまたは……シオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八歳の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。およそシオン、または、組織せられたるステーキ部内に住める者の律法はかくの如し。」(教義と聖約 68:25-26)

世は今や不正に満ち、我々の敵、サタンは正義に対し総力をあげて攻撃を加えている。子供と若人とはサタンの主な標的である。彼らはどこにあってても邪悪と不道徳の宣伝にさらされがちである。どこを向いても彼らは、あらゆる聖なるものと義なる原則とを破壊し、あざむく悪巧みにほんろうされている。

もしも、我々の子供たちがこのサタンの猛襲に耐えるに充分強化され得るとすれば、主の指示に従って、彼らは家庭で教えられ、訓練されねばならない。

神権者はみな各々その召しに伴う威厳と力とをもって、自身の家に秩序をもたらそうではないか。また家庭の夕べを定期的に行ない、「小児たちを光明と真理の中に」(教義と聖約 93:40) 導き、ホーム・ティーチングの責任を引き受けて、家族をよく訪問し、高め、励まし、鼓舞して、その家族に模範を示そうではないか。かくしてシオンの子供たちは、悪魔の奸計に対抗することができ、教会は「起ちて己が光を輝かし、(その)光よろずの国民のはたじるし」となり始めるであろう。(教義と聖約 115:5)

も く じ

予言者のことば

一つの大変な教え………大管長 ジョセフ・フィールディング・スミス……	229
新たに任命された教会幹部………	230
約束は成就された………マーベル・ジョーンズ・ガボット……	236
第一に信仰………スティープン・アフレック……	239
管理監督のページ	
意志の疎通………ジョン H. バンデンバーク……	241
リマ豆………ジム・ジャーディン……	243
神の武具で身を固めなさい………副管長 ハロルド B. リー……	244
武具となるあなたの態度………ユタ大学学生部長 ニール・マックスウェル……	246
今も永世にも………W. グレン・ハーモン……	247
モルモン経による繁栄の考察………ジョン W. ベニオン博士……	250
おこないとけっか………ブレイン N. リー……	252
ローカルニュース………	254
方向を変えなければ………リチャード L. エバンズ……裏表紙	

子供のページ

その日を幸福なものに………キャロル C. スミス……	30
ルドルフォという名のやぎ………ロザリイ W. ドス……	31

9月のこよみ

1 日

1901年、日本への伝道が開始さる。
ヒーバー J. グラント長老

7 日

1958年、ロンドン神殿献堂さる。
デビド O. マッケイ大管長

8 日

1873年、第9代大管長 デビド O. マッケイ、ユタ州ハンツビルで生まる。

11 日

1955年、スイス神殿献堂さる。
デビド O. マッケイ大管長

13 日

1898年、第5代大管長として、ロレンゾ・スノーが支持さる。

17 日

1884年、ローガン神殿献堂さる。
ジョン・テイラー大管長

21 日

1823年、天使モロナイ、ジョセフ・スミスに現わる。

23 日

1945年、アイダホ神殿献堂さる。
ジョージ・アルバート・スミス大管長

今月の表紙

今月の表紙は新たに任命された4名の教会幹部である。十二使徒評議員 ボイド K. パッカー長老(左上)、十二使徒評議員会補助 ジョセフ・アンダーソン長老(右上)、デビド B. ハイト長老(左下)、ウィリアム H. ベネット長老(右下)。



一つの 大切な教え

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

神 は教会の舵となりたもう。私はあなたがたと共に、この一大真理のうちに喜びを感じている。教会は人間の業ではなく、人間により作られたものでもない。それは世の救い主なる主によりたてられた。ジョセフ・スミスがまさしく自ら証している通りに召され任命されたことを私は証する。すなわち、彼は、我々が住むこの神権時代を先導すべく召され、完全なる福音を確立し、神権を回復した。この神権は天父からの力であり、これにより我々は人の救いのためになすあらゆる福音の儀式を執行することができる。

私はこれらの真理を固く信じて疑わない。主は我々を迷いの中にはおかず、闇の中を手探りで進むままにもしておきたまわない。主の教会は啓示のみたまにより導かれ、主の靈感が頭に立つ人々の上に注がれている。

私は福音の諸原則を学ぶたびに、このみ業が変わることなき大切な原則にもとずいているという偉大な真理を再び思い起こし、私の心は喜びに満たされる。それらの原則は変わってはならないし、変わることはあり得ない、それらは永遠だからである。我々は進歩を信じるが、主が与えたもうた原則に人の考えをおき代えることはできない。もしおき代えることがなければ、主が選び我々にあらわしたもうた計画により、我々は救われうるのである。

人が計画を公にし、理論を選び、見知らぬ仕事を紹介し数多くの教義を教える際にも、唯一の教えが基となるであろう。そして、我々はそれから離れることができない。すなわち、あらゆる事柄は世の贖い主なるイエス・キリストに集中されるという教えである。我々はキリストを肉体における天父の独り子、すなわち不滅の父を持ち、肉体において世に住みたもうた唯一のお方として受け入れている。イエス・キリストの長子権と辭誕にまつわる諸条件により、イエス・キリ

ストは人類の贖い主となりたもうた。そして主の犠牲により主がたてられた偉大な贖いの計画を我々が受け入れ、悔い改めるといふ条件のもとに、我々は天父の御許に立ちかえることができる。

これらのことを考えることにより、主がどのようにすべての事柄を秩序の中に確立し、完全な体系を与えたもうかという、教会の組織に関することも、いささか心に浮んでくる。人はその組織を改良することはできない。もし我々は、主があらわされた組織を、そのあらわされたままに運用するならば、あらゆることは完全になるであろう。なぜなら、その組織は完全であり、その理論、その計画には欠点がないからである。

すべてが一度に与えられたわけではなかった。それは今もなお、我々の必要に応じて啓示されている。そして予言者ジョセフ・スミスが述べた真理、彼が神について教えたことがその中で明らかにされている。

このように主は計画を備えられ、我々が真理と正義と謙遜を知って進歩することができるように、その計画を啓示したもうたのである。もし主が意図しておられる通りに我々が完全にその計画に従うなら、教会内には何の不正もあら探しもなく、また会員たちの心に、しっと、羨望、争い、悲しみもなくなるであろう。それらのすべては止み、我々は主に仕え主の戒めを守るといふ一つの望みを持って、統一戦線に立つであろう。

主は教会とともにあり、我々を導いておられる。主のみたまはこの民の上に注がれている。主が我々に望みたもうことは、我々がみな一つとなって、謙遜に主に仕えることなのである。

新たに任命された教会幹部

十二使徒評議員

ボイド K. パッカー長老

ジェイ M. トッド

ボイド K. パッカー長老の名前は教会員にとって耳新しい名前ではない。パッカー長老は過去9年間教会幹部であり、現在わずか45歳の若さである。世界各地の聖徒たちはパッカー長老の勧告を聞き、静かな口調の中に人をひきつけながらも、鋭いユーモアを交えた率直な彼の演説を聞いている。

パッカー長老を訪れる人は、彼の片時も忘れないほほえみとすばらしい態度を忘れられなくなる。彼は、知恵を得ることと、その表現方法を求めることの意味について、年齢からは考えられないほどのすばらしい業績を残している男の中の男として知られている。

しかし、ボイド K. パッカー長老は新たに予言者、聖見者、啓示を受くる者すなわち十二使徒評議員会会員として支持され特別な地位を果たすこととなった。

これまでのパッカー長老を略記すると、ユタ州ブリガム市にて少年時代をすごし、ローガン神殿でドナ・スミスと結婚、教育学士、20代に6年間高等評議員、4年間市議会議員を勤め、市から功労賞を受けた。教会セミナー(宗教講座)およびインスティテュート(神学講座)の副校長(20代で指名された)、1961年(37歳の誕生日直後)十二使徒評議員会補助に召された。

しかし、人となり、使命、すべてを略記することはできないが次にあげるパッカー長老自身の言葉と彼を良く知る人々の言葉にそれらがよく表わされている。

「何年も前に、私は人生におけるいくつかの基本的な目的すなわち私のなりたいものを選びました。第一に私は良い父親になりたいと思いました。これは職業の選択に限ったものではありませんでした。良い父親になるということは、私が方向を定める上での最後のよりどころとなるものだと考え、そのため生活、趣味、社会上の機会さえも、その理想に照らし合わせて考えなければならなかったと感じていました。間もなく、父親らしい父親になるための完全な計画は福音であることに気づき、私は教会に通い、聖典を学び、役員の話に耳を傾けるようになりました。これは私の知識の倉庫です。家庭は福音の中心であり、私の生活の中心です。私はいろいろな興味あるものやおもしろいものを見てきましたが、世界のどこをとっても、家庭におきかえることはできません」

パッカー長老と姉妹(「完全な妻」と申しあげたい)は男7人女3人計10人の子供たちに恵まれている。南ソルトレーク

溪谷にあるパッカー家の農場はまさに安らぎを得る場所である。

「私はどちらかという和大家族の方が育てやすいと思っています。それは何をなしとげるつもりかその目標で決まります。物質的な恵みを与えたいと思うなら、当然子供が少なければ少ない程、一人当たり多くのものを与えることができます。一方、利己心を捨てること、責任、協力、互いに重んじることを教えようとするなら、まず十分な人数のいる、秩序のある家族がなければなりません。子供たちは儉約、まに合わせることを、何かを作り出すことを学び、物質的に足りないところを埋め合わせる以上の恵みを受けていることを知りました。私の子供たちは育った環境に似つかわしく成長すると思います。」

イラ W. とエマ・ジェンセン・パッカーの11人の子供の10番目に生まれたパッカー長老は、大家族について話す時に、自分もそれを経験した者として話しているのである。「私の生まれ育った家族を抜きにして私がこの地位にまで来たことをお話しすることはできません。

私たちは数に恵まれていましたが、父母にも恵まれていました。両親はもっぱら良い家族を作ることに労力を費していました。私の生活についてお話しする価値のあると思うことはただ一つ、私が家族すなわち両親、兄弟、姉妹それに私自身の家族から学んだことです。私は生まれ育った家族よりも私自身の家族からの方が多くの教訓を得ています。」

「2番目の目標は、良い人間になりたいということでした。多くの人はそれを言うのを恥づかしがりますが、私は恥づかしがありません。私は善良な人間、何か良いことをする人間になりたいと思っていました。特に、天の御父と地上の父親にとって良い息子になりたいと思ってきました。私は自分がそうならない限り、良い子供を持つことはできないと思っています。私たちが自分自身にもう一人のもっと価値ある人をつけ加えることは、天父の栄光に帰することだと考えています。私が喜んで与えたくないものは、受ける資格がないと感じてきました。」

パッカー長老が関心を抱いていることを聞いてみると、彼の人柄がわかる。「森の中を一緒に歩いてみなければ、彼を本当に知ることはできない」と長い間の親友であり、七十人最高評議員のA. セオドア・タトル長老は語っている。「ボイドは自然を愛している。山々、動物、特に小鳥を。小鳥をよ

く観察している。鳥を見たり、鳴き声を聞いたりすれば、すぐさま種類と名前をあてられるほどだ。鳥の名や習性を知っているし、鳥の絵を描いたり、彫刻するのが好きだ。そしてとてもうまい。自然愛好者であると共に、自然を描く画家でもあるようだ。以前住んでいた家の壁にその地方に見られるあらゆる種類の鳥を描いていた。それはとてもきれいだった。彼は木、植物、動物、中でも鳥の命を非常に大切にしている。」

パッカー長老をよく知るある友人は「彼について一つ言えることは、彼は物を美しくする人だということです。家族の人と一緒に絵を書いたり、床をみがいたり、大工仕事をしたり、植物を植えたり、畑を耕したりというようにものごとを整えることの好きな人です。周囲にあるものはなんでも、独特な創造的な方法で、喜ばしく、美しくするのです」と話している。

また、「パッカー長老がセミナリーの校長をしておられた時、観察力の秀れたある教師はこう語っていました。『彼は非常に心の鋭い人です。どういう意味かと言いますと、ものごとを理解して、正しく整理できる人だということです。』」とある友人は語っている。またかつての同僚はこう寸評している。「彼の言動は常に理論整然としている。そこで私は彼に尋ねてみたことがある。『あなたの知恵はどこから生まれるのですか』と。」

この質問はパッカー長老を少なからずとまどわせたかも知れない。これは答えにはならないが、パッカー長老が教会員はすべて自分を見い出す必要があると深く信じていることを理解する鍵である。「教会すなわち私たちにはまだ開発され

ていない大きな力があると思っています。なぜ開発されていないかと言いますと、私たちは自分たちの方法でものごとを行なっているからです。主の方法に従えば、さらに大きな報いがあるに違いありません。しかし、私たちは何をし、何を考えるべきなのか、主の方法あるいはみこころを、尋ねてみないのです。なぜ天父にお話ししないのでしょうか。特定のこと、現実の問題をお話ししないわけですか。なぜ地上の父親に対するようにひんぱんにお話をしないのですか。」

パッカー長老の職場の同僚は、彼について語っている。「彼は祈りの人です。非常によく祈る人です。主から聞くことを知っている人です。」

管理能力、指導力は自己管理の一部である。この点についてパッカー長老は非常に秀れている。「彼は信頼を勝ち得る何事にもくじけない目的意識に加えて立派な態度を身につけた天性の指導者である」と一人の同僚は語っている。また、パッカー長老の部下の一人はこう話している。「彼はあるべき姿で人を扱う方です。権限を委譲する時は、文字通りに権限を与えるのです。彼と話をすると、彼の考えに同調して話している自分に気付くことでしょう。こうして、自分ももっと良くなりたい、もっと創造的になり、もっと責任感のある人間になりたいと思わざるを得なくなるのです。」

パッカー長老をよく知る人は以上のように考えている。これは新たに十二使徒評議員会の空席を埋めるため召されたパッカー長老のはんの一部でしかない。ある教会幹部はいみじくもこう語っている。「間もなく全教会員は主が正しい召しを行なわれたこと、主が誤ることはないことを知るであろう。」



前列：パッカー長老、ドナ・パッカー姉妹、エルドン、スペンサー、ケネス（伝道中）
後列：ローレル、ラッセル、デビッド、アレン、ゲイル、キャサリン、ローレンス



前列左より：ジーン A. アンダーソン、アン・カード、エライン・アンダーソン・カード、マイケル・カード(床の上)、
レイン・カード、ジョセフ・アンダーソン長老、ノーマン・アンダーソン姉妹、スコット(赤ん坊)、ジュディとV. ロバート
ピーターソン、後列左より：バーバラ、シャリ、ジョセフ、ジョセフ・ロバート・アンダーソン、ウィリアム・カード、
ベット・アンダーソン・ピーターソン、デビッド、キンバリー(赤ん坊)、キャシー・ライト

十二使徒評議員会補助

ジョセフ・アンダーソン長老

アルバート L. ゾベル Jr.

ジョセフ・アンダーソンは1889年11月20日、スコットランド移民のジョージおよびイサベラ・ワトソン・アンダーソンの間にソルトレーク市で生まれた。父親は鉄道員を職業としていた。ジョセフは子供の頃、ロイワード部(ユタ州)で初等協会の書記に召されたが、これをきっかけに長年書記として数々の地位についた。信頼が求められ、細部にわたっても重視されるこの職に、彼は多大な威厳と効用性をもたらした。

ジョセフは1905年、当時デビッド O. マッケイが校長を勤めていたユタ州オグデンのウェーバー学院を卒業した。1911年10月スイス・ドイツ伝道部に宣教師として召され、1912年6月にはスイス・ドイツ伝道部の大会書記をつとめ、1914年5月に伝道を終えた。

1921年グラント大管長の秘書の仕事について問い合わせたところ、タバナクルで行なわれているMIA 6月大会に出席し、大管長メッセージを記録するように言われた。アンダーソン長老は記録した後報告して待った。だが何も起こらなかった。後にグラント大管長が1921年11月22日彼の65回の誕生日にアッセンブリーホールで末日聖徒の学生たちに講演するため、アンダーソン長老に出席してもらい、話を書き取つて

欲しいとの依頼を受けた。

「グラント大管長は私の仕事に目を見張りました。1922年2月1日私はグラント大管長の秘書になり、死去されるまでの23年間彼と一緒にでした。どんな二人が集まっても、私とグラント大管長ほど密接にはなれないでしょう。旅行をする時はいつも一緒でした。本当に父と子のようにでした。」

アンダーソン長老がグラント大管長の秘書を勤めていた期間の大部分は、大管長会の書記をも兼ねていた。そして1945年グラント大管長の死後も引き続いて大管長会の書記をつとめた。長年の間、彼はソルトレーク神殿内で開かれる大管長会、毎週の十二使徒評議員会会長会、十二使徒評議員会に出席し、議事と記録をとり続けてきた。

「ウェーバー学院の学生であったころから私はマッケイ大管長ととても親しく、マッケイ大管長ほどの教師をどこにも見つけることができませんでした。マッケイ大管長は偉大な人格と視野の持ち主であり、人々から非常に愛された人であり、まさに神の予言者でした。

私はジョセフ・フィールディング・スミス大管長をずっと愛してきましたし、彼の福音と聖典の知識、主への献身の故に心から尊敬しています。スミス大管長は心のやさしい愛に

あふれた方で、人々に悔い改めを宣べ伝える義務を感じておられる方です。『汝ら今の代の人々に向いて、悔改めのほか何事をも語るべからず』と言われた主の言葉が自分の責任だと感じておられます。スミス大管長はまさにこの時のために主が選ばれた予言者です。」

アンダーソン長老は1915年11月11日ソルトレーク神殿にてノーマン・ピーターソン姉妹と結婚し、現在二人の娘一人の息子に恵まれている。アンダーソン姉妹は1942年から1961年までYWMI A中央管理会員に召された。

アンダーソン姉妹は夫をこう語っている。

「妻は夫のことを他のだれよりもよく知っているはずですが、私は夫に対して少しえこひいきをしていると言わなければなりません。彼はこうかつという言葉には全く縁がない人ですし、他人を悪く言うのも聞いたことがありません。そしていつも他人のことを思いやり、また利己的なところのない人です。特徴と言えば、福音に対する大きな信仰と愛、無私、

忍耐、寛容、理解をあげます。夫は誤ちに対して寛大です。夫と若人の間に世代の隔差などというものはありません。若い人たちが夫のところへ、よく問題をもってきています。私たちは与えられている家族と喜びを共にできることを感謝しています。」

アンダーソン長老が十二使徒会補助に召された時、ハロルド B. リー副管長は次のように語っている。「アンダーソン長老は、何もののにも比べられないまた恐らく何ものも越えることのできない知識と経験を教会幹部の輪の中へもたらした。」

リー副管長はアンダーソン長老の召しについて最後にこう述べている。「彼の召しは、彼の働きを幹部が認めたということだけでなく、主は注意して見ておられ、教会も益を得るように彼の能力を最大に発揮させるため彼に靈感を与えたもうたことの証である。」

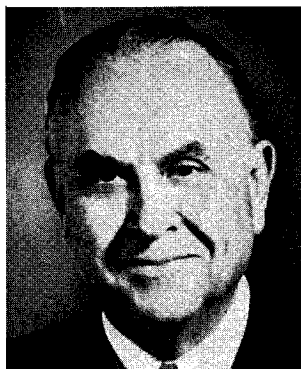
十二使徒評議員会補助

デビッド B. ハイト長老

マーベル・ジョーンズ・ガボット

社 会において私たちに課せられているチャレンジは、人々と仲良く暮し、人々の必要、望み、抱負を理解する

ようになることです」とデビッド B. ハイト長老は語る。
新たに十二使徒評議員会補助に任命されたこの長老にとっ



左上：ルビー・ハイト姉妹とハイト長老、右上：デビッド・ハイト、アンジェラ・ボーエン ハイト一家、左下：ジョン・ハンツマン、カレン・ハイト・ハンツマン一家、右下：ロバート・ハイト、ドロシー・ハースト・ハイト一家

て、人々と共に働くことはチャレンジであるばかりか喜びでもある。

「私は人々と共に居り、共に働くのが楽しい。今まで生涯を通じて私は、会社、海軍、公務、教会で人々と共に働いてきました」とハイト兄弟は語る。

ハイト長老は1906年9月2日アイダホ州オークレイでヘクター・カレブ・ハイト、クララ・ジョセフィン・タトルの間に生まれた。そして、1930年ユタ州フェアビュー出身のルビー・オルソン姉妹と結婚し、現在二人の息子一人の娘と13人の孫がある。

「私の家族はいつも親しい気持にあふれています」とハイト長老は言う。日曜日の朝ハイト長老が教会の新しい地位に支持された時、ハイト姉妹、3人の子供と何人かの孫たちはタバナクルに出席していた。

ハイト長老の教会における経歴は多様であり、興味がある。カリフォルニア州パロアルトで監督会、高等評議員を勤めた後、パロアルトステーキ部長に召された。その職にあった時、スコットランド伝道部長に召された。また十二使徒評議員会地区代表をも勤めた。この召しにあった時のことを、ハイト長老は次のように語っている。「私は本当に喜んで仕事をしました。ステーキ部長、副ステーキ部長、監督たちに会い、彼らが偉大な福音の計画を目のあたりにするお役に立てたことは、私にとってすばらしいことでした。兄弟たちと共に働き、考えを交換し合い、彼らの必要と問題を理解しようとするその責任は本当に喜びでした。意志の伝達に関して、私たちは心に思っているそのままを他の人に移そうと決めました。また、これは人々と交わる上で重要なことでした。」

人々と積極的に交際する、これはハイト長老がユタ州ローガンで学生生活を送った時代に始まる。彼はユタ州立農業大学（現在のユタ州立大学）で運動部のマネージャーをしてい

た。卒業後、彼は小売商に勤めた。幾度かの商売不振にもめげず、着実にこの道で足を伸ばして行った。

母親の教えを忠実に守り、教会の原則に従って生きる模範は、ハイト兄弟の昇進に大きな役割を演じた。社長に呼ばれて昇進の話を聞いた時、ハイト兄弟はこう答えた。「社長は私にその地域の支配人になって欲しいと思っているかどうか知りませんし、私がアイダホ州の小さなモルモンの町で生まれ、私の標準は会社の人たちのそれと違っていることを御存知かどうか知りません。支配人になったら私のやり方は従来のものとは全然違います。」

「無論知っているよ。だから君に頼むんだ」と社長は答えた。

ハイト長老は祝福師の言葉の中にある彼が教会のために教会外の友達を得るであろうという約束を決して忘れはしなかった。「人々の前に立ちて、汝らが何者であり、汝らの標準を知らさば、人々はそのゆえに汝を敬うべし」この言葉を実行することの難しさを知ったとハイト長老は語っている。

「生活の中に奉仕の分野を築きなさい。そして結婚する時には、夫・妻として生活の大部分を主と隣人への奉仕に捧げることになるのだということを理解していなさい。あなたの思い、目的、望みに奉仕の精神を組み入れ、そうした後に時間を正しく組み立てなさい。あなたがそうしたいと思うならそのようになるでしょう」とハイト長老は話している。

人々への愛、教会や社会での働き、奉仕をしたいという望み、デビッド・ハイト長老はこれらを携えて、新しい地位に彼の事業能力、組織力、広汎な経営手腕を発揮することであろう。

「この奉仕の業は教会全体を通してよく行なわれていません。教会に連なることは喜びであり、祝福です。私たちは教会で責任を与えられることにより、家族にも個人にも大きな恵みを受けています。」

十二使徒評議員会補助

ウィリアム H. ベネット長老

ウィリアム T. サイクス

ウィリアム・ハンター・ベネットにとって、「勝利よりも敗北によって、より深く人生の教訓を学ぶ」という言葉は深い意味を持っている。ベネット長老の今までに歩んできた道に沿って勝利の足跡ははるかかなたまで続いている。敗北という言葉とこの身のたけ 183 センチの人とを結びつけることは不適當かも知れない。この人はより高い教育を受けようと決心して、カナダのアルバータにある農場から出てきて学問を学び、アメリカの学者の間で名誉ある地位につ

いたのである。

ベネット長老は、15歳で退学した時に、一つの厳しい教訓を学んだ。かんばつの年が続き、収穫が乏しく、また経済恐慌が続いたために、彼は多くの学課を受けることができなかった。そして学業が遅れたので、彼は落胆してやめたのである。2年後彼は、当時レスブリッジのステーキ部長であったヒュー B. ブラウンと、後に系図協会の書記になったアーチボールド F. ベネットの靈感あふれる数々の話を聞いて



前列：ジャクリーン、ベネット長老、キャミリー・ケイ、ジュリー、デボラ、
後列：ウィリアム・ブラッドフォード、マリー・アン、パトリシア・ベネット姉妹

奮い立った。彼は当時のことを次のように回想している。

「私はくわの柄をもったままてん菜農場に立ちつくし、私の将来をつくづくとながめました。そして私は学校に戻り、学業を続けられるということをまず自分に示し、次に両親や兄弟姉妹、友人に示そうと決心しました。」

ウィリアム H. ベネットは、1910年11月5日、ウィリアム・ベネット、メアリー・ウォーカー・ベネットのむすことしてカナダ、アルバータ州のテーパーで生まれた。アーチボールド F. ベネットが調べた結果、ベネット長老にはインディアン系の血が流れているとのことである。

大学の業務が多忙であるにもかかわらず、ベネット長老はいつも時間を見つけて教会で働いてきた。彼はMIA、日曜学校および神権の職を活発に果たし、長年イースト・キャッシュのステーキ部長会の一員であった。またベネット長老は教会の神権伝道委員会と福祉委員会でも働いた。そして十二使徒評議員会補助に召される時には、ローガンとキャッシュ地区担当の十二使徒地区代表であった。

ベネット長老は、1950年4月12日、パトリシア・ジュンクリステンセンとローガン神殿で結婚し、現在6人の子供がいる。

ベネット長老は、老若男女を問わず、すべての人々の問題について心配している。

教育家、宗教指導者として、彼は若者たちの話に耳を傾け学問上の問題、個人的な問題に助けを与えてきた。

また彼の子供たちには高い標準を守ることを価値をたえず思い起こさせている。今日の若者について彼は次のように言

っている。「彼らの多くは何か混乱しており、かつての若者たちよりもっと困難で複雑な事態を処理しなければなりません。私は、今までで最も素晴らしい世代であると思います。」

また年配の人々について彼は次のように述べている。「私たちはこうして生涯を過ごしてきたのだから、残りの人生を十分に味わいましょう。人は年をとるにつれて経験が広くなり、多くの物事を知るようになるので、年令が進むにつれて興味が変わってくるものです。私は年配の方々が満足するものの一つにめい想することがあげられると思います。」

ベネット長老は、友人たちに力強くかつ誠実に福音の理想を守るという印象を与えている。ある人はこのように言った「ウィリアム・ベネットは確かに教会に改宗しています。彼はあるがままの自分しか表わさない人です。生涯を通じて、彼はどんなに大きな反対にあっても、決してひるむことなく自分の信仰を守り通しました。」

ベネット長老が自分の新しい召しと、十二使徒評議員との新しい関係について話した時、彼の声には謙遜さと誠実味があふれていた。「私は兄弟たちを非常に尊敬し、愛し、賞賛しています。彼らと共にこの業に働くことができるのは、素晴らしい特権であり、喜びであります。この職に召されることはほんとうに素晴らしい経験です。」

ウィリアム H. ベネットには、敗北と犠牲から生まれた謙遜さと、若い頃に定めた目標を達成しようとする決心とひたむきな努力から得られた力とが宿っている。



フリダ・ジョーン・ジェンセン・リー

一約束は 成就された一

マーベル・ジョーンズ・ガボット

「**汝**らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82:10) 彼女はゆっ

くりと、一つ一つの言葉の意味をかみしめながらこの聖句を読み、それからこう言った。「これはまさしく真理だわ。」

末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会第一副管長の妻ハロルド B. リー夫人は、青と白の毛糸のスーツに身を包んで白い長椅子に座っていた。

静かで気取らず、考え方、振舞いすべての面に上品さの見えるフリダ・ジョーン・ジェンセン姉妹は、1963年6月17日、リー長老と結婚した。二人の家庭には、読書、勉学、音楽、美術に親しんでいることを思わせる優雅さと教養がにじみでている。リー姉妹は誇らしげにグランドピアノを指さし





て、そのピアノがセロファンに包まれ、大きなサテンのリボンをつけたまま、二人が結婚後の旅行から帰って来るのを待っていたことを話してくれた。それはリー長老からの結婚祝いのプレゼントであった。

リー兄弟姉妹はどちらもピアニストである。「私たちの教会で、音楽は福音を教えるうえで大きな役割を果たしています。それに私たちモルモンの音楽には、永遠に生き続ける素晴らしい歌があります」とリー姉妹は述べている。1969年の6月に行なわれたYWMIA百年祭記念パーティーの席

上、リー姉妹は教会の若人の音楽になした多大な貢献をたたえられ、金の飾り皿を受けた。

音楽は常にリー姉妹の生活の一部となっているのである。彼女は小学校入学と同時にピアノの練習をはじめた。7歳の時にクレイ・レイド教授につき、その後ブリガム・ヤング大学のアンソニー C. ランド教授から教えを受けた。彼女の音楽を愛する心は年と共に強まり、今ではそのレパートリーも彼女の母親の好きな、よく知られている曲「エストレリータ」から、数多くのクラシック音楽にまでおよんでいる。彼女は特にショパンの曲が好きである。

リー姉妹は、ユタ州プロボで過ごした子供時代のことを話してくれた。忠実な末日聖徒であった両親は、愛、学問、音

楽、良い物を分かち合う精神において模範であった。デンマークからすぐれた宝石細工師としての技術をアメリカに持ち込んだ彼女の父親ジュリアス・ジェンセン氏は、かつて船長であった。そのため世界中の物語や地理の話をして子供たちを喜ばせた。

彼女は母親のクリスチン H. チューゼン・ジェンセン姉妹から、家事や女性らしさ、私欲をなくして与えることの祝福を学んだ。「私はライスプディングやアップルパイを幾度となく、近所の人々やワード部の人々に持って行ってあげました」とリー姉妹は語っている。

フリダ・ジョーンは姉のエドナ（ジェラルド・カチール夫人）、兄のフランクリン J. D. ジェンセンと共に幸福な子供時代を過ごしながら、母親が常に口にしていた「主に近くありなさい」という言葉を心に抱いて成長していった。

私たちが話していると、電話が鳴り、同時に玄関のブザーが聞えた。私はリー姉妹のあとについて台所に行った。そこで彼女は、遅い夕食に備えずっととろ火で煮ていたリー長老の好きなビーフシチューの加減をみた。

彼女はマルタとマリヤの家にイエスが訪れた時の話を思い出した。マルタは「接待のことで忙しくて心をとらみだし」ていたが、マリヤはイエスの足もとに座って御言葉を聞いていた。リー姉妹は、イエスがマルタを愛しておられたにもかかわらず、イエスはマリヤが「その良い方を選んだ」と言われたことを思い出したのである。（ルカ10：40～42参照）それからつけ加えて言った。「私はよく自分はマルタだろうかマリヤだろうかと自分に問うてみます。私たちのどれだけの人が本当に主婦としてつとめているのでしょうか。私たちはこの世のことに生活が追われて動きがとれなくなったりしないのでしょうか。それともマリヤの選んだ『良い』方を思い起こすのでしょうか。私たち主婦は、人々が自分の家や庭をどう思っているかではなく、家庭がその中にいる人々にどんな影響を与えるかを自分自身に問うているのでしょうか。私たちは永遠を目ざしているのでしょうか。唯物的な考え方ではなく深い霊的なものがあるのでしょうか。私たちの愛する子供たちの話を聞くために時間をとっているのでしょうか。私たちが小さな子供たちの生活を形作るとはなんという特権でしょうか。」

まだ若かった頃、早く結婚をしたいと願っていたフリダ・ジョーンは計画は果たされなかった。しかし彼女はその愛を養女のジェニエル（ドン・ラスマセン夫人）や姪のジェラルディン（ルイス H. カリスター夫人）に注いだ。リー姉妹のその無私な愛は、老いも若きもまわりのすべての人々が感じている。たとえば彼女は、あるプライマリー中央管理会員の92歳になる母親に花やカードを贈ったり、電話をしたりしている。「私はそれが彼らにとってどんな意味を持つかわかっているのです」と語るリー姉妹。このような思いやりは、晩年祝福師となった義父ウィリアム D. クール氏に対するやさ

しい心づかいにも見られる。そしてリー副管長との結婚後、この愛は彼の二人の娘ヘレン（L. プレント・ゴーツ夫人）とマーリン・ウィルキンス（死去）に注がれ、さらには彼の孫にまでおよんでいる。

子供に対する彼女の態度について、リー長老はこう言っている。「彼女は多くの子供たちの心の扉をあける鍵を持っています。先生方にもその秘けつを教えることができるんです。彼女と子供たちとの対話は、聞いているとほんとうに美しいものです。

児童心理学の応用技術や理解力は彼女の天性であって、一生涯続くものでしょう。人々に理解されない子供たちに、彼女は絶えず手をさしのべています。」

人の名前や顔を覚えているフリダ・ジョーン・リーの記憶力、微妙なユーモアを解する心は彼女を知っている人々が尊敬の気持を持って思い起こす素晴らしい特質である。

ブリガム・ヤング大学で教育課程を修めたあと、リー姉妹は、ジョーダン学校区域の小学教育長になる以前、小学校で教鞭をとった。のちに、彼女はユタ大学、カリフォルニア大学、コロンビア大学の各大学院において研究を続けた。

教師や教育指導者との豊かな交流によって、彼女は教育面での見識をますます深めていった。

子供たちの教師、教師たちの指導者として、フリダ・ジョーン・リーは、小さな子供たちを知っている教師、心をくばっている教師とは、子供たちの心をとらえて教える教師であると信じている。

「この大切な成長期にあって、私たちは子供たちの霊的な面に破綻をきたすようなことがあってはなりません。私たちが彼らに深く関心を寄せているならば、必ずや驚異の業を行なうことができるのです」と彼女は言っている。

リー姉妹は、神が人々に与え続けて下さる限り人も与え続けるべきであると信じて、だれに対してもそうするように、これまで教師や子供たちに自分の時間と自分自身を捧げてきた。

彼女がYWMI A、プライマリー両中央管理会で働いた時、その知識と思慮深さとは教会の若人に多大な貢献をなすに大きな力となったのである。

人生の計画の見通しや、主の律法を守る人々になされている主の約束を常に心に留めて、リー姉妹は世界中の若者にこう語るのである。「自分の力だけに頼って生きてはなりません。そのような人は世の中で最も孤独な人となるでしょう。自分自身よりもずっと大きな何かの一部になるよう進んで努力しなさい。進んで奉仕しなさい。教会と神に近くありなさい。あなたがたが自分で寿命を伸ばそうとしてもそれはできないことです。しかし、日々の生活を自分でよく生かすことはできます。自分自身の生活を広くも深くもすることができるのです。」

第一に 信仰

スティーブン・アフレック



私たちは偉大な人々のいる技術の進歩した世界、人々を奮い立たせ困惑させる、争いに満ちた世界に住んでいる。現在は証拠と論理が人間の存在を物語ってくれる。

証拠と数字の世界にあって、主が我々に福音の第一原則は論理ではなく、信仰であると信ずるように望まれていることは、なんと驚きではないだろうか。

信仰を求めての私の体験と、どのようにしてそれが福音の第一原則であるとわかるようになったかをここで話させていたと思う。

私は高校を卒業して、ある大学に入学した。その時私は17歳だった。子供の時に教わった原則の幾つかが、すぐに私にとってチャレンジとなったのである。学問と知識豊かな私の尊敬していた教授たちは、宗教に関して私が子供のころに教わった事柄は先祖代々伝えられている伝統以外の何物でもないこと、すなわち人間は神の存在を信じ、神が人々に関心を寄せていると信じて自分自身を慰めているにすぎないということ、また宗教がなければ結局は死で終わってしまう人生に答えが得られない人々にとっての一種の鎮静剤であると話したのである。彼らは歴史や科学、時には自分自身の考えに確信を与えるために聖典までも用いながら、論理的な方法で彼らの哲学を提起したのであった。事実、私はそれに困惑してしまった。

彼らは何年間も人間の哲学を強調してきていた。私が年若いために理解できなかった分野において、彼らは経験を積んでいたのである。その全知識をもってしても神について論理的な説明がつかないために、彼らは神より与えられたという福音を信じるのは、人間の弱さであるというのであった。

私は見過ごしたできないチャレンジにぶつかったのだ

る。そこに中道はなかった。私は生涯で、もはや他の人々の証に頼ることもできず、神が生きているかどうか、またその福音が真実かどうかを自分で見出すのにぐずぐずしてはおられない時期に来たように思えたのである。そうするために、私は計画を立てねばならなかった。いろいろ深刻に考えてから、私は誓約を交わすことに決心した。2カ月の間私は忠実に探究することを主と約束したのである。2カ月という期間には、自分の結論を出すのに十分のように思えた。

最初の試みは徒労に終わってしまったようである。私は心から尊敬している教会の人々のところへ行き、彼らがどうして福音が真実であるとわかるのかを尋ねた。例外なく、すべての人々から思っていた通りの答えが返ってきた。それは説明できない心の中にある感情がそうさせてくれるというのであった。私は彼らがそうした感情を持っているということを疑いはしなかったが、それは私の質問の答えにはならなかった。私はそれ以上の何かを求めていたのである。そこで私はその問題に別の方法で取り組むことにした。

私はモルモン経を読んで、それを歴史、科学、考古学、その他の聖典と比較して、それらの分野で認められている真理と一致するかどうかを調べようと決心した。それは良い方法のように思われたし、事実教授たちもそのような経験的な探究に異議をはさむことはできなかった。

私はどこかへ行こうとしているような気分であった。少なくとも私は自分で何かをしていたのだ。私の科学的なやり方は、いくつかの興味深い事実を明るみに出し、私にモルモン経の民と彼らの歴史について深く考えさせるようになった。私はモルモン経が確かに論理立った説明がなされており驚くほど興味深い記録であるという結論に達したのである。

私は自分の徹底した研究に誇りを感じた。しかし、私の求めている感情、他の人々が私に話してくれた感情を私はまだ持てなかった。私にはそれが理解できなかったのである。私は何か悪いことでもしたというのだろうか。事実、私は落胆した。しかし2カ月間探究し続けるという約束を思い出したのである。

私はこのことを両親には話さなかった。実を言えば、彼らが私に失望するのを恐れて、心の不安を知られたくなかったのである。しかし母は母親としてのインスピレーションのようなものを持っていたのに違いない。ある晩、私が床についてから部屋に入ってきて、私が何かで悩んでいたのを知っていたと言った。そこで私は自分の求めている答えについて母に話したのである。

彼女は福音が真実であるとしてどうしてわかったのだろうか。私は彼女が私の質問に再び質問で答えてきたのに驚いてしまった。彼女は私に彼女を愛しているかどうかと尋ねた。それほど深く考えずに私は愛していると答えた。彼女はもう一度聞いてから、こう言った。「あなたが私を愛しているということはどうしてわかるの。」今度はしばらく考えなければならなかった。それを言葉で現わすようにと彼女は促した。私は感情を害され、やや怒り気味でこう答えた。「とにかくば

くはお母さんを愛していることがわかるんだよ。」それは、試験管の中に入れたり、科学の公式で証明できるようなものではなく、心の奥底にある感情、真理のようなものであったと言わねばならないが、確かに感じられたのであった。私は自分で母を愛していることがわかっていし、さらに論理の世界にあっても、母親に対する私の愛は、恐らくそれまでに経験した中で最も確かなものであったと言えよう。

私の次の質問はこうであった。「お母さんに対する愛と証にどんなつながりがあるの。」母は、聖霊によって明らかにされる知識は、ちょうど私たち母親と息子が、互いに愛し合っていることをそれぞれ心の奥底で感じることにたとえられると説明してくれた。それから彼女は、私に探究心を起こさせ、人は熱心に捜し求めなくてはならないという確信を得させることになった心の動揺に感謝していると言った。また、断食と祈りによって探究を続けるように私を励ましてくれ、教会での活動に続けて参加することが大切であると言った。

そう、証を得るには信じて祈らなければならなかったのである。なぜこのことを思いつかなかったのだろうか。科学的な方法による解答だけを捜し求めていて、主の方法を見逃がしていたのである。私は論理的方法で解答を得ようとするあまり、福音の第一原則である信仰ということを見落していたのである。

はじめ私は疑い深い態度をとっていたのだった。私は実に主が生きており、モルモン経が主のみ言葉であるということを知らせてくれるように要求していたのである。私はさっそく主の方法で試してみようと決心し、断食した。断食については小さい時から教わっていたので、それが自己修養のための一方法であることを知っていた。

ある日聖典を読んでいて、アルマの言葉に目がとまった。

「こればかりではない。あなたたちは私自身これらのことを知らない者であるとは思わないか。ごらん、私は自分がこれまでに話したことはみな本当であると自分で知っていることを証する。どのようにしてそれが確かであることを知っているかと問うならば、これは神の聖い『みたま』が私に示したもうたのである。私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った。そこで主なる神がその聖い『みたま』によってこれを私に示したもうたので、私は自分でこれが真理であることを知っている。この聖い『みたま』とはすなわち私の中にある啓示の『みたま』である。」(アルマ5:45-46)

私はこのアルマの言葉を思いめぐらし、アルマがこれを私のために書いたのではないかというような気持を持って、興奮しながらその言葉を何度も読み返した。その言葉が私や私と同年代の仲間にもあてはまることを思い胸を躍らせた。そのころ、私は友人の多くが不信を抱いていることに気づき、その中のある者は日曜学校やMIA、聖餐会に来ていないのを知っていた。日曜学校の教師が「学位が欲しかったら、大



学を退学してはならない」と言った時に、私もそこでふと、数多い教会の活動に参加して自分の時間を無駄に費しているのではないだろうかと思ったこともあった。私は教会が真実かどうかを見出さなければならなかったし、証もほしかった。私はずっと活発に働いてきた。しかし私は今、必ずしも自分が常に油断なく熱心に真理を求めていなかったことに気づいてきたのである。

信じようとする私の望みが、アルマの言っている種まきの話にたとえられることがわかってきたのである。(アルマ 32:26~43参照) それは良い種であったに違いない。なぜなら私の心の中に芽が出てきて、私の信仰が増したからである。

それから数週間して、私は信仰をもち謙遜になって、聖霊が私に福音の真理を示して下さるようにと主に祈った。私は真心から熱心に祈り求めたのである。しかし祈りを終えた時私はなんの示現も啓示も受けなかったので、がっかりした。私はなお福音が真実なものかどうかがわからなかった。そこにはまだ疑いの影があったのである。

ゆっくりベッドにもぐり込み、横になりながら私は過ぎ去った数カ月間に思いをめぐらした。私は一度に一つの点を探究しながら、主と交わした誓約を正直に果たしてきたと思った。私は生について、また避けられない死について考えはじめた。すると死は驚くほどに大きな比率を占めているのであった。それから私は自分を神の息子として考えてみた。私は神の子供であり、主が私のことを気づかっている下さると教えられてきた。その暗い部屋のベッドに横たわっていて、私

は神の子供であることにうなずけたのだった。私は神を私の父、文字通り私の霊の父として受け入れられたのである。私は、天父が私を愛して下さること、私が地上にある間になすべき使命をご存知で、その使命を私に、私だけに委ねられているということを祝福師の祝福を通して私に明らかにして下さったことに気づいたのである。

もし天父がなんらかの理由で私を地上に送り、なすべきことを与えて下さったとするなら、死は私に再び天父に近づく機会を与えてくれるものになると私は考えた。

私の心は安らいで、神が私を知っておられ、気づかっている下さることが全身で感じられた。そしてその瞬間、私はモルモン経が神のみ言葉であり、福音が真実なものであることを知ったのである。

心の視界をせばめることは危険なことではない。私の教わった教授たちは心の視界をせばめていたのである。

確かに、主はモルモン経の予言者ヤコブを通して私たちに言われている。

「おお悪魔の狡猾な謀ごとよ。おお人間の虚栄と意志の弱さと愚さよ。人間は学問があると自分は賢いと思って神の訓戒に耳をかさず、自分独りで解ると思って神の訓戒をうち捨てるから、その智慧は愚であって何の益にもならず、かれらはついに亡びるのである。しかし、人間がもしも神の訓戒に従うならば、学問のあるのも善いことである。」(Ⅱニーファイ 9:28, 29)

信仰こそ福音の第一原則である。

管理監督のページ

意志の疎通

監理監督

ジョン H. バンデンバーグ

「・・・シオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば・・・悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば罪その両親の頭に留るべし。・・・また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」(教義と聖約68:25, 28)

両親はこれらの偉大な真理を子供たちにどのように教えるのであろうか。それは子供たちを愛し、正しい模範を示すことによってである。あらゆる人のもつ基本的欲求の一つに、

認めてもらいたいという欲求がある。誤ちを犯しやすい年齢の子供を持つ両親は、子供たちに悔い改め、信仰、祈り、あるいは主の前に正しく歩むことを教える前に、まず彼らを神の子供として認め、一個の人間として愛さなければならない。たとえば悔い改めの教義は、若者が間違いを犯した時にはただ厳しく批判したり、しりぞけるだけで教えることはできないのである。

両親と子供は互いに愛し合ってはいても、本当に心を通わせようとしないう悪い習慣に陥りやすい。一人立ちしようと一

生懸命になっている十代の若者は、しばしば両親に背を向けようとする。そのため、あらゆる機会を利用して意志の疎通を図らなくてはならない。

たとえば、ある父親は自家用車というせまい親密になれる場を利用して心を通い合わせることができるというて、息子と一緒に毎朝車で新聞配達をしていることに感謝している。また、日曜の朝はいつも車を使わずに、息子と雑談しながら教会までの道を歩いていくことによって互いの理解を深めている父親もいる。

大抵の両親は子供を心から愛している。両親が子供を批判したりとがめたりする時は「子供のためを思って」そうするのである。十代の若者はよく、非難されるのがわかっているから両親に話さないのだと主張する。このように、彼らは両親の耳ざわりにならないことだけを話し、自分の本当の気持ちを自分の胸だけに秘めておいて自分自身を守ろうとするのである。

多くの家庭では、余暇にテレビを見るだけで、意志の疎通を図る機会を逃がしている。家族全員がそろってテレビを見ていても、その番組に対して反応を示し、話し合いを持たなければ、結局は家族のみんなが一人でその番組を見ているのと同じことになる。

夕食時を心を通い合わせる最良の時間として活用している家庭もある。会話は、両親が子供たちに考えさせるような質問をすることによってうまく運ばれる。その時間は、しばしば食事時に見られる口論をなくし、家族全員に学び合い、楽しむ機会を与える。

両親は一般に、子供たちを教えるという責任を知っているが、時々自分が不適当だと感じるのである。両親の持つ力の最も大いなる源、それは言うまでもなく天父である。彼らは自分自身を神の子供として、また実際子供を育てるうえで神のよき伴侶として愛し敬わなくてはならない。彼らは神の治めたもう中であって、両親となるにふさわしい人々とみなされたのである。そうでなければ彼らは子供を育てるという機会にあずからなかったであろう。

最近、監督との面接で一人の少年が、なんでも「ああしなさい、こうしなさい」と言われて腹を立てているということ、自分は言われなくとも一人でやれるということ話をした。巧みに問いかけながら、監督はその少年が日曜の朝は神権会に行くようにと起こされ、また他の数々の教会の集会に出席するように母親にせきたてられることに腹を立てていることがわかった。さらに話してみると、その少年の腹だたしさの原因は、少年の母親が教会に行っていないということにあることが明らかになった。非教会員と結婚して、彼女は自分が教会の集会に出席しないことで夫とうまくいっていると感じたのだろう。しかし同時に、その母親は十代の息子に自分が若い時に受けたと同じ宗教教育が必要だと気づいていたのであ

る。彼女の努力は反抗という結果を招いたのである。その少年が必要とし望んでいたものは、母親が教会に行ってその模範を示してくれることであった。

イエスは言われた。「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ。」(マタイ19:19) 他の人々を愛するためにはまず、自分自身を愛さなければならない。自分自身を愛するためには、こうあればいいと思う自分ではなく、あるがままの自分を受け入れなければならない。我々はあるがままの自分を偽って、子供に影響を与えることはできないのである。若者はだまされない。彼らは現在の我々を知っている。我々が自分の不完全さを認め、それを克服しようと努力することによって、偽りの完全さという夢の世界に住むよりもはるかに効果的に若者との意志疎通の道が開けるのである。

救い主は言われた。「人をさばくな。自分がさばかれたいためである。」(マタイ7:1) 末日聖徒の教育家スティーブン R. コベイ氏はこう戒めている。「人を裁くということは人道に反することである。我々は、その人にある見解を持たせるにいたった数多くの要素を完全に理解しないでそのようなことは絶対にできない。」

不正に裁かれ拒まれたと感じた若者は、しばしば攻撃的になり、敵意、憤りを感じるものである。そのような若者にはより良い方向へ持っていこうとする積極的な態度が見られない。意志疎通の扉は閉ざされる。なぜなら、彼らは裏切る人々ではなく、信頼できる人々にしかその扉を開こうとしないからである。このように、若者が時々自分の本当の気持ちを両親よりも同年の仲間に話しやすいと思うのも無理はない。

彼らの同年の仲間もまた同じような問題に取り組んでいるかもしれないからである。彼らがわかってももらえるだろうと思っ話すのは、この共通の立場によるのである。しかし他方、両親もまた同様の問題と取り組んできたのだということに若者はなかなか気づかないのである。

幻覚剤を用いたために、頭が混乱し感覚の麻痺した一人の若者が最近自らの命を絶った。その若者があとに残したテープには、その若者の気持ちが驚くほどはっきり述べられている。もし彼が自分の気持ちを、両親や自分を愛してくれる他の人々に話すことができたなら、命を失わずにすんだことだろう。

両親や指導者にとって、たとえその過程が困難ではあっても、若者との意志の疎通を図るための方法を学び、実践することはほど大きな責任はない。子供たちがまだ小さかったところに見られた心の触れ合いなくして、十代の若者と意志疎通の道を開こうとすることは困難である。

我々はみなだれも忙しい。しかし、子供たちとの良い関係を築くという最も大切な仕事ができないほど忙がしすぎることもないよにしようではないか。

その日を幸福なものに

キャロル C. スミス

マリー・アンは5歳でした。マリー・アンとお母さんはいっしょに一日を外ですごしました。二人はすてきなレストランでお昼を食べ、今は買物をしています。その日は素晴らしい一日となり、お母さんとマリー・アンの二人は素晴らしい時をすごしていたのでした。マリー・アンは心のなかでとても幸福に感じました。

お母さんがリボンを見ているあいだ、マリー・アンは店のたなの上でみつけた小さなプラスチックのコップとさらでおとなしく遊んでいました。そのコップとさらがあまりちいさくてかわいらしいので、マリー・アンはすっかり気に入ってしまいました。

「いらっしゃい、マリー・アン。さあいきますよ。」お母さんがよびました。マリー・アンはすばやくたなのうえのはこの中にコップとさらをもどしました。でも、全部ではなく一つだけコップを残しておきました。そのコップをマリー・アンは自分のコートのポケットにさっとすべりこませました。マリー・アンはそのコップがとても気に入っていたし、店の人はあまり小さいので気がつかなかったのでしょう。

マリー・アンはお母さんと手をつないで、店から出ました。二人は車にのりこみ、駐車場から出ました。マリー・アンは座席にじっとすわっていました。お母さんはマリー・アンを見てたずねました。「私のかわいいおしゃべりさんは、いったいどうしちゃったの。」

マリー・アンは話ができるような気分ではありませんでした。マリー・アンはもうたのしくはありませんでした。きょう一日中感じていた、幸せでわくわくするような気持ちはもう消えてしまっていました。マリー・アンはみじめな気持ちになりました。

マリー・アンはポケットに手をすべりこませ、小さなコップをなでまわしました。彼女は指がコップにふれた時、もったいやかな気持ちがしました。マリー・アンはお母さんにいたかったのですが、のどがしめつけられるようで、話すことができませんでした。涙があふれ、マリー・アンの赤いコートにおちました。

「どうしたの」とお母さんが心配してたずねました。マリー・アンはポケットからコップをすずかにとり出して、お母さんに見せました。「どこからもってきたの。」

マリー・アンのくちびるがふるえていました。

「あなた、あのお店からもってきたのね。」

マリー・アンは自分のしたことを悔いる気持ちでいっぱい、涙をとめることができず、ただお母さんに「はい」とうなずくだけでした。

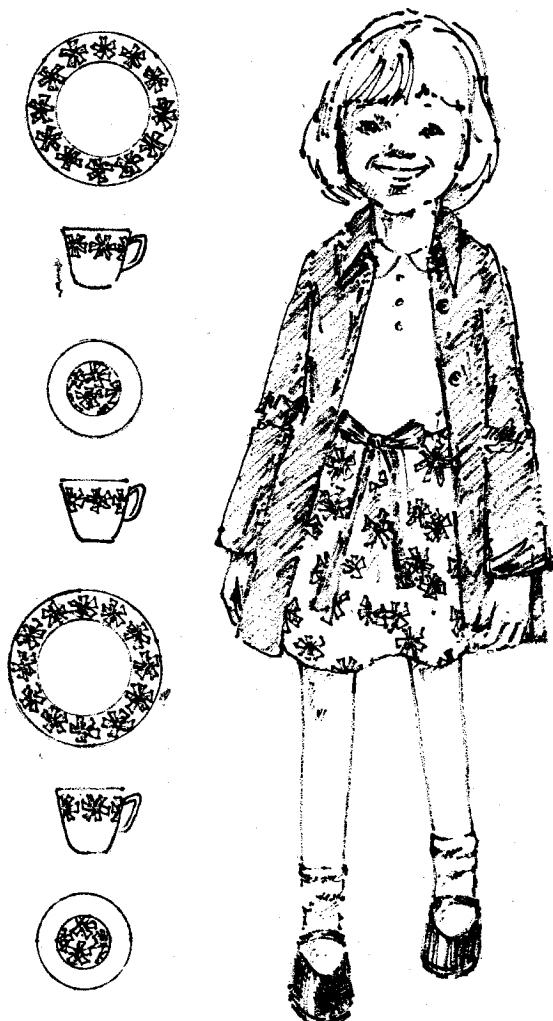
お母さんはすぐに車を店の方へむけて走らせました。お母さんとマリー・アンはいっしょに店に入りましたが、お母さんはうしろに立っていて、マリー・アンひとりでカウンターにいる店員のところに行かせました。

マリー・アンはふりかえってお母さんの方を見ました。お母さんがそこに立っているのでもマリー・アンの心はおちつき、しなくてはならないことに立ちむかう力ができました。マリー・アンはカウンターの上にコップをおきました。「私がこれをとりました。」マリー・アンは大きな声で言うことができました。「ごめんなさい。」その声はひとりごとのような小さな声でした。店員はお母さんの方をちらっと見てから、マリー・アンを見てにっこりしました。「ありがとう」と店員は静かにいい、それから「またこの店にいらしてお買物をしてくださいね」といいました。

マリー・アンの心の中のしかかっていた重みがずっと消えていき、マリー・アンも店員にほほえみかえました。マリー・アンとお母さんが車にもどると、お母さんはマリー・アンをだきしめました。

「私たちのせつかくの幸福な日をこんな悲しいものにしてしまつてごめんなさい」とマリー・アンがいました。

「マリー・アン！」とお母さんは抱きしめていました。「コップをとったことはいけないわ。でもあなたは私の一日を幸福なものにしてくれたわ。なぜって、私はあなたが、たとえそれがどんなにむずかしいときでも正しいことをえらぶということがわかったからですよ。」



メ エノ メエノ 「ルドルフォ、おまえどこにいてたんだい」マニエルは、白くて大きなやぎが道を自分の方へやってくるのを見てさげびました。

ルドルフォの返事は、その口からたれさがっている赤とオレンジ色のほそ長いぬのをもっとつよくムシャムシャとかむだけでした。

「ルドルフォノ」マニエルはびっくりしてさげびました。「口からたれさがっているのはなんだい。」

きいてはみたものの、マニエルにはそのほそ長いぬのきれがなんなのかわかっていました。それは男もののシャツのそででした。

この村にそのような色のシャツをもっている人はたったひとりしかいませんでした。その人はセニョール・メンドザという人でした。「あゝ、あゝ、あノ」マニエルは歯ぎしりしてさげびました。

とうもろこし畑で働いていたマニエルのお父さんのセニョール・レイモスがとんできました。「どうした、マニエル」とお父さんはさげびました。台

ルドルフォ

という名のやぎ

ロザリイ W. ドス

所からマニエルのお母さんのセニョーラ・レイモスがかけつけました。「マニエル、けがでもしたのかい。」

ベンチでみどりや赤のトウガラシをたばねていたマニエルのお姉さんのテレサもやってきました。「マニエル、どうしたっていうの。」

マニエルはただルドルフォの口からぶらさがっているシャツのそでを指さすばかりでした。

セニョール・レイモスもまた、それが、となりの家の人のものであることに気がつき、大声でさげびました。

「ルドルフォ、おまえは何をしでかしたのだ」

「たぶん、セニョール・メンドザが洗たくばにしている河原の岩の上から、ひろげてほしてあるのを見つけてもってきたんでしょう。」とマニエルのお母さんがいいました。

「しょうがないやつだ、おまえは」とテレサはルドルフォをしかりつけました。

でもルドルフォはまばたきひとつしませんでした。ルドルフォはただ赤とオレンジ色のシャツのそでをムシャムシャとかみつづけるばかりです。

「そんなにしかりつけたってむだだよ、もしもマニエルがルドルフォをしかりつないでいたら、こんなことにはならなかったのだ」とマニエルのおとうさんがいいました。

「だってばく、ちゃんとルドルフォをつないでいたよ」とマニエルがいいました。

テレサはルドルフォがつながれてい

た所に行ってみました。テレサはまだそこにしばりつけてあるつなをひろいあげていいました。「ルドルフォがこれをかみ切ったのだわ。」

レイモス家の4人は、みなこまったようすでおたがいに顔をみあわせました。となりの家のものをだめにするような動物をかつているということ是不運でした。

マニエルがいいました。「たぶん、セニョール・メンドザはシャツをだめにしたのはルドルフォだっていうことを知らないよ。」

セニョール・レイモスはむすこをみて、きびしくいいました。「しかしマニエル、おまえは知っているよ。」

マニエルはうなずいて、頭をたれました。

「セニョール・メンドザに、べんしようしなくてはなりませんわ。セニョール・メンドザはとてもよいかたですもの。うちのトラックがこわれた時には、いやな顔ひとつせず、お金もとらずに作物を市場にはこんでくれましたわ」とお母さんがいいました。

「私が病気の時だったわ。メンドザ夫人は私のために特別なスープをつく



ってきてくれたものよ」とテレサが思
い出していいました。

「私たちがとなりのひとに正しいこ
とをすれば、となりの人々も私たちに
よいことをしてくれるのだよ」とお父
さんがいいました。

マニエルは、ためらいがちに、小さ
な声でいいました。「ルドルフォのこ
とはぼくのせきにんだっていうことを
ぼくは知っているよ。ぼく、セニョー
ル・メンドザにシャツを買ってかえし
たいけど、そのお金がないんだ。」

セニョール・レイモスは、ポケット
をうらがえしてみました。そこには1
センタホ（10円）しかのこっていませ
んでした。「おまえを助けてあげられ
そうもないよ。とうもろこしのかり入
れまでは、これしかないんだ。」

マニエルのお母さんとお姉さんも、
悲しそうに頭をふりました。

ルドルフォがだめにしてしまったシャ
ツをべんしょうするために、新しい
シャツを買うだけのお金はありませ
んでした。

「どうしたらいいんだろう」ととほ
うにくれてマニエルはさけびました。

「たった一つ方法がある」とお父さ

んがいました。

「なんだかわかるかい、マニエル」
マニエルはうなずきました。「セニ
ョール・メンドザにルドルフォをあ
げらるんでしょ？ でもそんなことでき
ないよ。ルドルフォはぼくのペットなん
だ。ぼくが育てたんだもの。」

「お父さんの言うとおりよ、マニ
エル。おまえは正しいことをしなくては
ならないのよ」と、お母さんは静かに
いいました。

悲しそうにマニエルは、ルドルフォ

の首につなをかけ、メンドザの家にむ
かってゆっくりルドルフォをひっぱっ
ていきました。家からみえないところ
まできた時、マニエルは木の下に身を
なげだして、はげしくなきました。

ルドルフォはそばに立ってしずかに
草を食べていました。

「なぜおまえは、なにも考えずに、
そうやって立っていられるんだい」と
マニエルはいいました。「セニョール・
メンドザは村の市場におまえを売りに
出すにちがいない。おまえとこうして
会えるのもこれがさいごなんだよ。」

「メエ／メエ／メエ／」とルドルフ
ォはなき、また草をおいしそうに食べ
つづけるだけでした。

マニエルは考えまいとしました。た
ぶん逃げ出そうと思えば、マニエルと
ルドルフォは逃げるのができたでし
ょう。しかしマニエルはそんなことは
しまいと決心しました。逃げたからと
いって、どうなるわけでもありません
でした。

マニエルはまた、べつのことを思い
つきました。マニエルは、ここでしば
らく待っていて、それから家に帰って
セニョール、メンドザが来るすだったと



いえばよいとも思いました。でもマニエルは、これもしないことにしました。

うそをついてもなんにもならないのです。

「おいで、ルドルフォ、さあいつて私たちのしなければならぬことをしよう」とマニエルはいいました。マニエルが着いた時、セニョール・メンドザは庭で、にわとりにえさをやっているところでした。

マニエルは気がかわらないうちにすばやく話しました。「セニョール・メンドザ、ぼく、ルドルフォをつれてきました。ルドルフォはあなたのものです。」セニョール・メンドザはわけがわからないようすでした。「なぜルドルフォはわしのものなのかね。」

マニエルはわけを話しました。「ルドルフォが、あなたの赤とオレンジ色のすてきなシャツをだめにしてしまったのです。でもぼくには、ほかのシャツを買ってかえすだけのお金がないんです。それで、あなたのところに、ルドルフォをつれてきました。」マニエルは、赤とオレンジ色のシャツのきれ

はしをみせました。

セニョール・メンドザはおなかをかかえて笑いました。「それはわしの気にいってた赤とオレンジ色のシャツだったんだが、着ふるしたものだから、やぶったんだよ。そして、それをトラックの油ふきにしてつかいはじめたっていうわけさ。」

「おじさんは、このシャツがたいせつにしていたものじゃないというんですね」マニエルはびっくりしてききました。

「そうだよ、マニエル。きみはわしに新しいシャツを買ってかえすことなんかないんだよ。ルドルフォを家につれて帰りなさい。これからはルドルフォをもっとしっかりつないでおくんだよ。このつきからは、そんなに運よくいかないかもしれないからね。」

「はい、そうします。メンドザおじさん。でもルドルフォは、どんなに強いつなでもおかまいなしにかみきってしまうわるいくせがあるんです」とマニエルはいいました。

「なんとか助けられると思うんだが……」セニョール・メンドザはそうやって近くのものおき小屋に行き、長い軽くてじょうぶなくさりをもってきました。

「ルドルフォもかみ切ったりはできないだろうよ。」

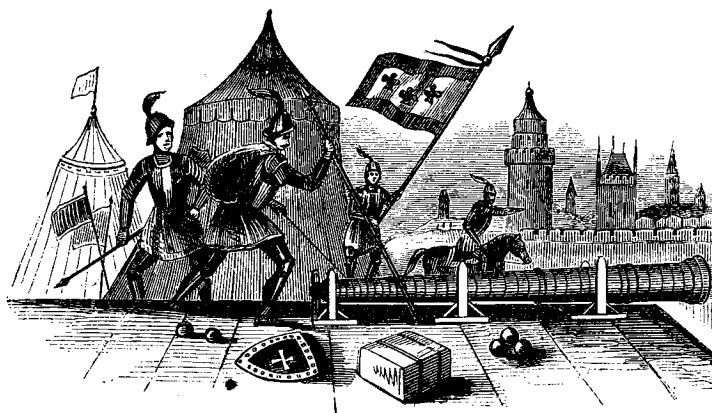
「ほんとうにありがとう。メンドザおじさん」とマニエルはうれしそうにいいました。

家に帰るとちゅう、マニエルはルドルフォにいいました。「お父さんの言ったことは本当だね。もしぼくたちがとなりのひとによいことをすればとなりのひとでもまたぼくたちによいことをしてくれる。」

「メエ！メエ！メエ！」ルドルフォがなきました。

このいたずらやぎは意味がわかってないのでしょくか、それともただもうことばがでなかったのでしょうか。





ジム・ジャーディン

リ マ豆のきれいな人でも、食べた方がいいのではないのでしょうか。そう、体にも良いし、わざわざ作ってくれている人もいるのですから。でももっと大切な理由があります。それは、自己訓練の問題です。

ウィリアム・ジェームズ (1842—1910) という心理学者は、人間はしたくないと思うことを毎日しなければならぬと言っています。だからリマ豆に限らず、きれいな物を食べることによって、少しずつ自己訓練をすることになります。そして重大な決定をしなければならない時に、これがとても役に立ちます。

家にいて、お母さんや妹が部屋に入ってきて来ても、すわり心地のいい椅子はゆずりたくないものです。でもこうした小さな親切をうるさがらずにすることが、主の戒めにある愛をもっと大きなことに示す始まりになる と思います。

学校の宿題も、特にテレビ番組で見たいものがある時には、やりたくないことの一つです。でも、いつもきちんと割り当てられたことをしておく、いい点がとれるばかりか、将来大学や



実社会、または教会で割り当てられたことをする時の練習にもなります。

新聞はたいいてい漫画かスポーツ欄から読み始める人が多いようですが、いやでもまず社説や大切な記事を読むようにしましょう。本を選ぶ時には、流行の手軽に読める本を避けて、少しむずかしくても価値ある本に取り組みましょう。そしてある日、読むのがいやだった本が自分の気に入りになっていることを発見するのです。こうしているうちに、聖典を読むのもずっと楽になることでしょう。

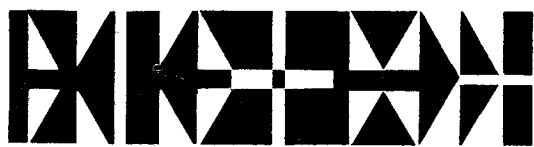
私たちは、ポケットにお金があるとついアイスクリームやジュースを買いたくなります。でもこれらの楽しみがすぐに消えてしまうことも知っています。ただお金を貯めるのではありませ

ん。最初は気がすすまないながらも小銭を貯めていたのが、伝道資金を貯めたり、断食献金や完全な什分の一を支払う時に役に立ち、お金の価値と人生における意味を学ぶことができます。

断食の原則から私たちが学ぶことはいろんな欲望をコントロールすることです。これも最初は気がすすまなくても、大きな試しが来た時に充分立ちうちできる力を養うための練習です。マッケイ大管長は言いました。断食の恵みが他ならぬ人格形成であるなら、それだけで私たちが断食する理由は充分であると。

小さな自己訓練を毎日積み重ねることにより、私たちの武具は少しずつ強くなり、いついかなる時にもサタンの力に負けない力を備えることができるのです。(著者が15歳の時の作品)

リマ豆



神の武具で 身を固めなさい

副管長 ハロルド B. リー

「**悪**魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」 (エペソ 6:11-12)

こう宣言した使徒パウロは、人生で最も恐ろしい戦いとは、人を滅ぼす銃や爆撃機のような人間の造り出した敵ではなく、暗やみから攻撃をかけ、しかも人が気づかずにいる敵に対するものだと言っているのである。

さらにパウロは、体の4つの部分を守るために必要な武具を身につけた勇士となるように言っている。この部分こそ、サタンとその軍勢が最大の攻撃的と狙い、正義の敵が人の心につけこむところである。

「すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき……また、救のかぶとをかぶり……なさい。」

(エペソ 6:14-15, 17)

徳と活力があなたの安全を守るものであれば、真理は腰の帯となるものである。それでは、真理はどのようにしてすべての悪や不貞からあなたを守るのだろうか。真理は知識であると言われた主の御言葉を覚えていただきたい。

「真理とは、事物の現在あるがまま、過去にありしまま、未来にあるがままの知識なり。」 (教義と聖約 93:24)

自分をふさわしくし、神殿において今も永世にもわたる結婚の新しくかつ永遠の誓約を結ぶ者は、日の栄の王国で永遠に続く家族となるために、最初の隅のかしら石を置くのである。その報いは、「とこしえに栄光をその頭に付け加えられん」ことである。

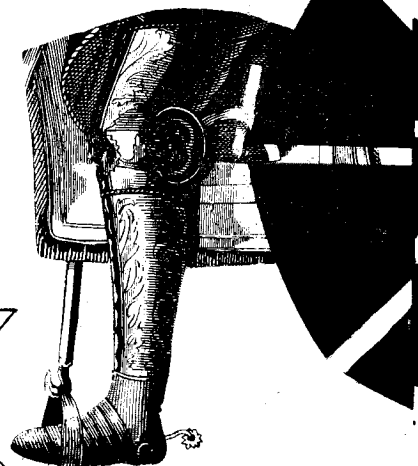
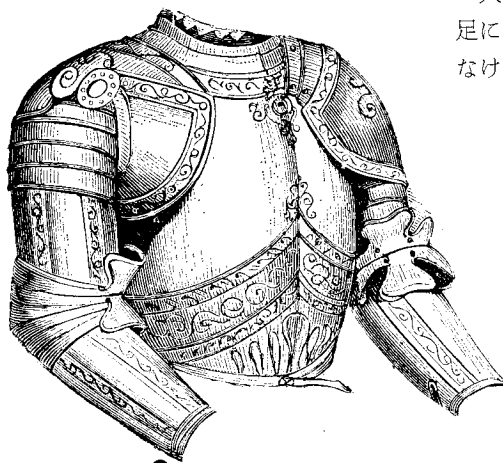
(アブラハム 3:26)

これらの永遠の真理は、もし心から信ずるならば、あなたの生命同様に徳

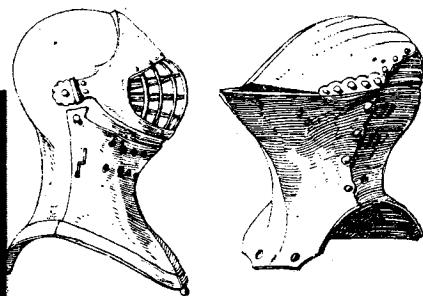
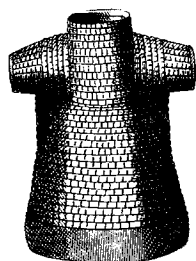
を守る腰の帯となることだろう。しかし、神と自分との関係、神聖な結婚の目的、そして永遠性における自分の将来に対して疑いの念を抱かせる人の思いにとらわれるなら、偽りの支配に悩まされるのである。なぜなら、人の思いはこれらの危険から守ってくれる真理とは相反するものだからである。

では、心を守り、正しい行ないをなさしめる胸当てはどうだろうか。これは、正義と呼ばれる材質で作られる。正しい人は、自分の誤ちを日々悔い改めなければならないことを認識しているため、自己改善に努めている。そして一日の終わりに、今日もすべてを力の限りに果たしたと心から神に言えるよう、毎日を最良の日とする努力を払っているのである。放縦な生活で身体をだめにすることも、若気のおろかさで判断を誤ることもない。夢や幻にとらわれることなく熱心に知性を求め、その身体はたくましい。この正しい人が正義の胸当てをつければ、「心の清さゆえに、十の力」を得る。

人生の目標あるいは目的をあらわす足には、「平和の福音の備え」をはかなければならない。備えは勝利への道

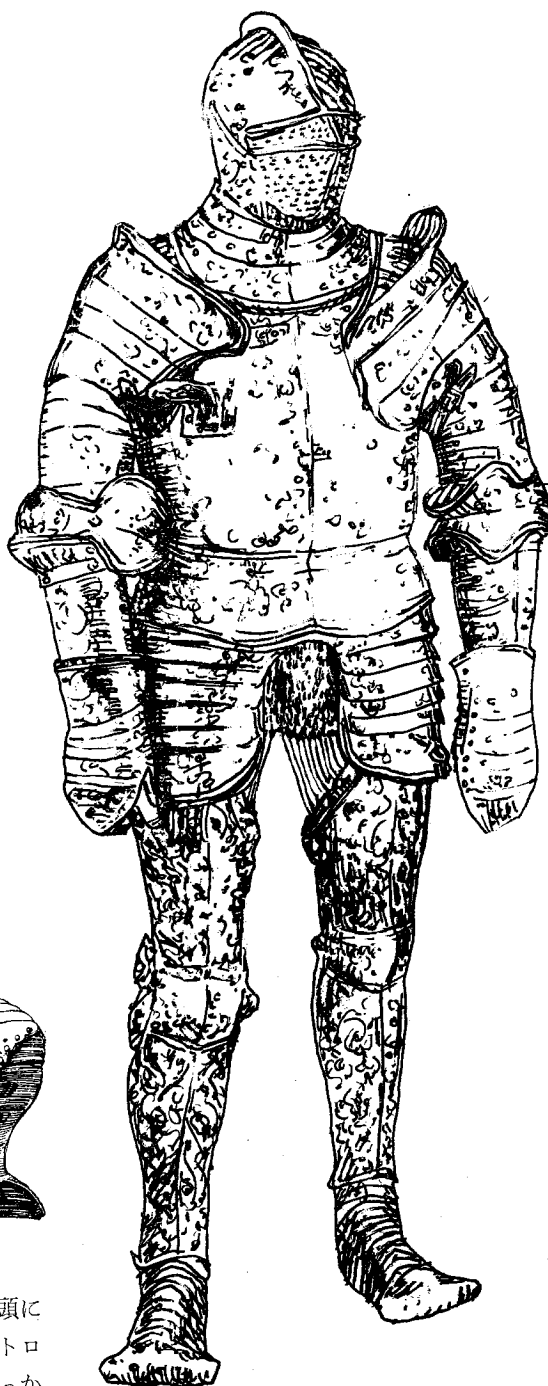


であり、「つねに身を慎しむことは安全への代価」だからである。そして恐れは、備えをなさず無意味に機会を浪費することからくる罰である。物質的な戦いであれ精神的な戦いであれ、何事にも、備えのできている人に勝利の運がある。



予言者の教える最後の武具は、頭にかぶるかぶとである。身体をコントロールする頭脳や知力は、敵からしっかりと守らなければならない。それは、「人となりは、その心に思うそのまま」だからである。（欽定訳箴言23：7）「救いのかぶと」こそ我々のかぶるものである。

この救いとは、現世にあって良い生活をした報いとして、父なる神と御子のみもとで住まうという永遠の権利を得ることである。行動を決定する我々の思いや決断は、救いという究極の目標をいつも心に描くならば、栄えある将来の位をあやうくするすべてのものに立ち向かうことができる。現世での努力に対する永遠の報いを自信をもって迎えらるる人は、たえず大きな試し



にあいながらもそれに耐えてきた人である。たとえば失恋の時にも自殺などはしない。愛する人を失っても絶望せず、宿願のコンテストなどに破れてもひるむことをしない。戦争や破壊が自分の将来を暗くすることがあっても、彼は意気消沈などしない。この世的なことを超越して、救いという目標を決して見失わない人である。

殺人を犯したくなかったら怒らないことをおぼえ、性的な罪に陥りたくないのなら不道德な思いを捨てなければならない。また盗みをして牢に入れられたくなければ、貪ることをやめなけ



ればならない。あらゆる誘惑に立ち向かうには、前もってよく備えをしなければならない。勇気、決断力、そして善をなそうとする積極性がある始めて、「人生の戦い」に勝つことができる。さもなくば、我々を守るといわれているこの世の武具も役に立たないのである。

戦いにおいてこの積極性を身につけるには、パウロの忠告を行なう必要がある。

「その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また……御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。」（エペソ 6：16-17）

「信仰のたて」と「御霊の剣、すなわち、神の言」がどのような働きをなすか注目したい。神の御言葉が教える信仰の導きにより、我々には人生が試練の場であるとわかる。また神の御言葉にもあるように、たとえその時は苦しくとも、神のごとくになるための努力が私たちの益になることも、この信仰により理解できる。

やみの力と悪の霊に対抗するための知識を得て、訓練と備えをなした今、「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に合っても見捨てられない。倒されても滅びない」のである。（Ⅱコリント 4：8-9）

シオンの若者よ、神の武具で身を固めなさい。

武具となる あなたの態度

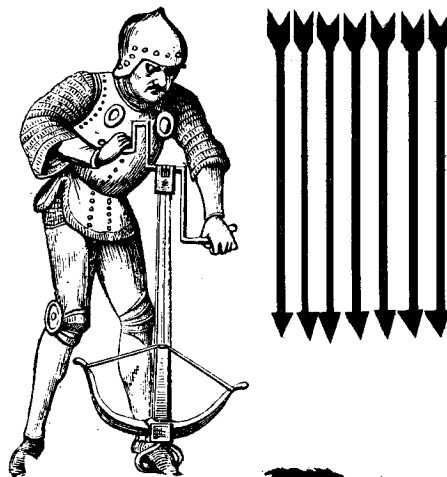
ユタ大学学生部長
ニール・マックスウェル

誘惑は常に存在する。そのため我々は少しずつ、時には知らないうちに、罪に対する心がまえをゆるめていることがある。この心がまえで、誘惑に対する我々の反応も決まる。もし社会の転変により罪が決まると感じているなら、誘惑に対する我々の反応も相対的であろう。また、罪を神と自分との関係から生じるものであると正直に認めるなら、その時々誘惑に対抗する態度が身につくことだろう。

旧約聖書では、ダビデとヨセフの2人が、誘惑の受けとめ方を違った形で示している。この2人は共に「神に選

ばれた」人であった。また、たぐいまれな能力を持ち、社会的にも名声を得た人である。しかし2人も人間である以上誘惑を受けたのである。

バテシバの入浴している光景がダビデの目に入ってしまったのは、仕方のないことであった。しかし、心の中でみだらなことを考えた彼は、それを行動に移してしまった。「ダビデは人をつかわしてその女のことを探らせ」、誘惑に負けたのである。（Ⅱサムエル11：3）事実の発覚を恐れ、バテシバ



の夫であり忠義な家来であったウリヤを殺したことから、後になってダビデは自分の犯した罪に悩まされた。ダビデがこうして誘惑に屈した時、歴史的に著名な人物の一生が終わったのである。

一方、主人の妻から「毎日」言い寄られたヨセフは、次の2つの重要な点でダビデとは違った反応を示した。（創世39：10）ヨセフは、奴隷の身である自分には「何を…禁じられ」ていなかったが、主人の妻だけは例外であり「神に罪を犯すこと」はできないときびしい口調で言った。（創世39：9参照）また、真実がゆがめられるという危険に真向うから立ち向かい、その場の状況に押し流されるのではなく、誘惑を避けて「外にのがれ出た」のである。（創世39：9, 12）

もし罪を単なる人間関係から生じるものだと考えるなら、罪を犯すだけの理由があるからといってどんな大罪も言い逃れできるし、正当化できるのである。教会員に対する世のそしりについて述べたリーハイの言葉には、我々を誘惑するだけでなく、福音を受け入れようとする者を「指さしてあざける風の態度」が描かれている。（Ⅰニーフエイ8：27）リーハイによると、福音がよくないからではなく、人が「あざける」というただそれだけの理由で心に恥しく思う者がいるのである。

自分を神の息子、娘であると認め、神に対し罪を犯したくないと心に強く願う時、我々は道徳を正しい標準におくことになる。正しい道徳とは、人の思いや時代を超越し、誘惑に陥いらせるのではなく、ふり払わせる、正しい態度や物の見方である。



「今も 永世にも」

—教義と聖約 132:18—

W. グレン・ハーモン

「今も永世にも」，この言葉はリズムカルな響きを持っている。それは一度耳にするとじっと聞かずにはいられない，天使が奏でる音楽の一小節を思わせる。さらに，その言葉はよく知れば知るほど，意味の深さ，広さがわかってくる。地上で行なわれる最もすばらしい福音の儀式，昇栄と永遠の進歩へ至る扉の鍵である永遠の結婚の誓約の中には永遠の限りない可能性が秘められている。

「今」と「永世」という連続した用法に注目していただきたい。一見すると重複しているように見えるが，実はその言葉の意味をはっきりさせ，お互いに強調しているのである。1843年，日の栄の結婚に関する啓示が与えられた時，キリスト教世界のどこにも，死後も夫婦のつながり，両親と子供のつながりがあるという考えは見られなかった。婚姻が秘蹟の一つにまで高められていたカトリック教会においてさえ，結婚は死により解消されていたし，今なおそうである¹。プロテスタントの世界では，結婚は昔も今も「死が二人を分かちまで」²という単なる公の約束ごとでしかない。

近代に与えられた啓示やその啓示を信じてきた人々が実際に経験した事柄に照らしてみると，またこの世の歴史が，結婚と家族関係が我々の文明の重要な擁護者であるとはっきり証明していることから考えてみると，今日この最も大切な，最も普遍的な人間関係が，一般にこの世限りのものと考えられていることはなんと奇妙な信じ難いことだろうか。

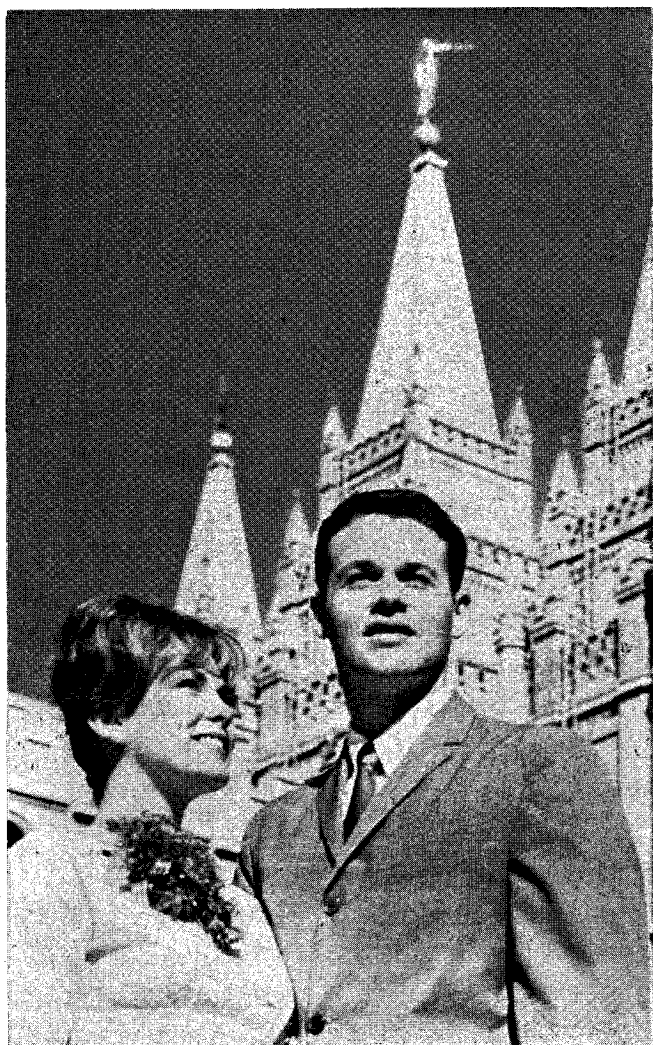
この「今も永世にも」という言葉は，主の宮居において固く結ばれた結婚がそのようなものでないことをはっきり証している。

時期——普遍的な原則

以上述べたようなことだけではない。時期というものがある。結び固めの儀式で用いられる「今」という言葉は，肉体の誕生から始まって肉体の死で終わる，永遠のうちの特別な部分をさすものである。このように，今も永世にもわたる結婚をするために，我々は「今」すなわちこの世に生きている間，誕生と死という二つの定点の中のどこかで結婚の契りを交さなくてはならないのである。

人生で物事をなす適切な時期を決めることの大切さは強調されすぎることではないが，これを決めることは容易ではないであろう。物事をなす順序とその効果は，すべてそれを行なう時期にかかっている。そして限りない進歩の生活にあって永遠の中の特別な部分を作り上げているものはその一連の出来事なのである。

農夫は，作物を植えたり栽培する時にこのことを知る。たくさん収穫を得るには，前もってよく耕した畑に最もふさわしい時期を選んで植えつけをしなくてはならない。そのあ



との水をやるにしても、栽培をするにしても、さらには刈り入れをする時にさえも、良い結果を得るためには最も適した時期を選ばなくてはならないのである。「時期」、それは物事が成功するか失敗するかがかかっている普遍的な原則である。

あらゆる目的のための時期

「時期」にそわないことから来る否定的な結果は、世界大戦から生まれた「小さすぎる遅すぎる」という胸の痛む言葉で現わされている。

ウィリアム・シェークスピアは、時期というものの肯定的、否定的な面をいきいきと描写している。

「人事にはおよそ潮時というものがある。うまく満潮に乗りさえすれば成功するが、かりにもこいつを捕えそこなうと人間一生の航海は、不幸災厄つづきという浅瀬にとじこめられてしまう。」³

この深い真理に対して、聖典も黙してはいない。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり……愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある。」(伝道3:1~4, 8)

人の子は、自ら次のように強調しておられる。「まず神の国と神の義とを求めなさい。」そしてそのようにするならば「これらのもの(食物、飲物、衣服)は、すべて添えて与えられるであろう」と約束された。(マタイ6:33)

時期の原則は、この世が造られる前の天上の大会議でも暗に言われている。

「……われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。而して、最初の位を保つ者は更に付け加えられ、最初の位を保たざる者は、最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して、第二の位を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に付け加えられん。」(アブラハム 3:24~26)

更に付け加えられること

モルモンの言い方によれば、「最初の位」は人間の前世での生活をさし、「第二の位」は地上での生活をさしている。その最初の位を保つために、我々は最初の位にいる間になんらかの条件を満たさなくてはならなかったに違いない。それ

らの条件が何んであったか、また前世での生活それ自体の記憶はすべて我々から取り去られているが、それは疑いもなくこの世にあって完全な試しを受ける場を備えるという賢明な目的のためであった。しかし一般的な意味では、人々がそこで受けたさまざまな試しは、強いられることなく自ら進んで神のみ心に従うか、またその能力があるかどうかを決定する自己修養の機会であったであろう。我々は「付け加えられ」て「第二の位」に来るにふさわしい者となるまでに、大きな試しを受けてそれに打ち勝たなければならなかった。それは大学で学位を取るのに似ている。学位を取るために、我々はまず第一に学問に打ちこまなければならないのである。

我々が「第二の位」に来たということは、最初の位で「試し」に打ち勝ち、「付け加えられ」たことを意味するものである。我々に与えられた報いは肉体である。それは誕生と同時に霊の家、霊の宮となった。また肉体は霊に、それ以前にはできなかったことを可能にさせるのである。

肉体を受けてからは一層の試しがある。霊は肉体を使うことを学ぶだけでなく、肉体を完全に霊の目的に合わせ、方向づけなくてはならない。その霊の目的とは、霊がまだ肉体を得ていない前世における目的と同じ高い目的である。このように神のごとき目的が霊と霊の宿る肉体を支配するようになった時にのみ、我々は第二の位を保ち、「とこしえに付け加えられ」るにふさわしい者となるのである。

男と女

霊が肉体を制御しようとする時、男女間の関係ほど普遍的で重要な試しは他にない。この関係は、生命の源泉、種族の永続に大きな影響を与える。その重要性に比例して、純潔の律法を破つた場合はまったく墮落した状態へと陥り、一方律法に従った人々は永遠の栄えという最も高い位にあげられるのである。

男女のふさわしい親密な関係を示すものとして、結婚はすべて神の目にかなうはずであり、当然そうあるべきである。また最高の報いを得させる特別な試し、すなわち「とこしえに栄光をその頭に付け加えられる」すばらしい特権を与えてくれるのは日の栄の結婚の律法である。これは確かなにされ得るのである。このことをよく理解しながら日の栄の結婚を望まない人がいるだろうか。

しかし、根本的な法則には従わなければならない。すなわち、誓約は最もふさわしい時期に交されなくてはならない。「あとで」では遅すぎるのである。

「この新しく且つ永遠の誓約(永遠の結婚)に就きては、これはわが最高完全なる光栄のために定められたるものにして、わが最高完全の光栄を受くる者はこの律法を守らざるべからず、またこれを守るものとす。然らずば、その者の行き止りなるべし。」(教義と聖約132:6)

霊はこの地上において肉体の欲望、情欲を制御するのであ

る。それゆえ、進歩するために、男性と女性は地上にある間にこの日の栄の誓約を交し守らなくてはならないのである。なぜなら

「……………彼らこの世の外に去る時は、めとり嫁ぎすることなくして彼らは天に於て天使に任命せらる。而してこれらの天使は、彼らよりも遙かに高き光栄に適しき、また優れたる光栄、永久の効ある光栄に適しき者に奉仕すべき奉仕の僕なり。」(教義と聖約 132:16)

このように、日の栄の結婚の誓約はこの世にある間に交されなくてはならない。なぜそうしなくてはならないか、その理由を見極めることはそうむずかしいことではない。

肉体は、この世すなわち「第二の位」にいる間に得られる。霊がたえず進歩する中で、肉体が永遠に有用な離し難い道具となるように訓練し、鍛える機会を霊に与えること、これこそまさに「第二の位」の目的なのである。成長は、肉の世界ではなく霊の世界においてたえまなく続く。ヨハネが言っているように「人を生かすものは霊であって、肉はなんの

役にも立たない……………」のである。(ヨハネ 6:63) それゆえ、永遠における人の進歩の度合は、その人の霊がどの程度肉を制し、霊の目的にそわせたかによって決まる。聖典は、神の戒めがすべて俗世のものではなく、霊に関わるものであることを明らかにしている。(教義と聖約 29:34, 35参照)

日の栄の王国に入るために欠かせない霊の制御力、真の愛、一致を培うすばらしい場は、夫と妻、両親と子供の関係がうまくいっている家庭をおいて他にはない。

主の宮居で行なわれる「今も永世にも」わたる結婚は、そのようにして誓約を交した人々が、最もふさわしい時期にそれぞれの価値を示し、もっともふさわしい時期にこの偉大な律法に喜んで従ったことを示す証拠となる。それは常に忠実な者のためにのみ存在し、彼らは「とこしえに栄光をその頭に付け加えられ」るのである。

- 脚注 1, 新カトリック百科辞典(1967年)第9巻P.273
2, アメリカ百科辞典(1932年)第18巻P.313
3, 「ジュリアス・シーザー」第四幕, 第3場 218行

聖餐の聖句伴奏曲



9月の聖餐の聖句

大人日曜学校

「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」

(ヨシュア 24:15)

子供日曜学校

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」

(マタイ 5:8)

モルモン経による

ジョン W. ベニオン博士

末 日聖徒イエス・キリスト教会の多くの会員は人類の歴史上類を見ない生活水準に達している。近代の水準からすれば貧しいと思われる人々でさえも、過去の水準に比べて豊かであり、栄えている。

歴史的に見れば、現在の状態は急に変わることもあり得る。この全般的に繁栄が続けている時期がいつ終りを告げるかはだれも知らない。しかしながら、我々はかつて物質的に豊かな時代に生きた人々と同じ誘惑に直面しているのである。モルモン経には、繁栄が人々の生活に分裂を生じさせる可能性のあることについて豊富な資料がある。ニーファイ人とレーマン人の経験を読む時に、我々は物質的な恵みを数えるのもためらいがちになる。実際のところ恵みという言葉は注意して用いねばならない。なぜならば、人々がその危険に注意しない限り、繁栄は災いとなり、道徳的、霊的墮落をもたらし得るからである。これはモルモン経の教える最大の教訓の一つである。

他の条件のつりあいごとれているならば、物質的に豊かなことは生活を高めることになる。さらに、繁栄と義は両立が可能であるが、豊かであることには墮落の可能性が大きくなりまとう。そのため、繁栄下にある我々は充分な注意が必要である。繁栄下にあったニーファイ人の物語を分析してみると、今日我々の時代にも見られる幾つかの誘惑に屈服したことが明らかになる。

人々は繁栄の結果、虚栄心が強まり、独善に陥ることがある。人々は自らの富と、財産のゆえに自らを誇る誘惑に合う。この傾向がキリスト降誕の数年前ニーファイ人の間にあったことが記されている。

「五十二年目には、国民の心に生じたひどい高慢を除いては平安を妨げるものなしにその年は暮れた。この慢心は、民が地上で大いに富み栄えたから起ったのであって、日に日に増長した。」(ヒラマン3:36)

繁栄それ自体が人の性格を改善に向かわせることはない。物質的な所有と心の気高さとの間で相互に関連するものは何一つないにもかかわらず、人々は繁栄を得ると優越感を感じ、

自らの見方をゆがめるのである。

高慢になる誘惑と、繁栄下にある人々が神に関して尊大になる傾向には密接な関係がある。物質的に豊かであることは誤った安心感、支配感を生み人々に神の導きや助けが不必要だと感じさせるようになる。そして、主に感謝する気持、主により頼む気持がなくなっていく。

「また主がその民を栄えさせその農作物、家畜、金、銀およびあらゆる貴い製作物、あらゆる貴い天然物とを豊にし、……同時に民は安楽で隆盛を極めていたためにその心をかたくなにし、その神である主を忘れて聖者を足の下にふみにじることも明らかである。」(ヒラマン12:2)

神と我々との関係を深く意識し、神の助けが必要なことを感じるからこそ、霊性の根源である。残念ながら、物質的な繁栄は高慢あるいは錯覚とでも言うべきものを生む傾向にあり、その結果、霊的な事柄に対する我々の感度を鈍らせている。サムエルはニーファイ人のこの状態を認め、指摘している。「あなたたちは自分の神である主から与えられた物に対して神に感謝をせずに、いつも富のことばかり思っている。あなたたちの心は主に近づかず、非常に高慢に満たされて大きなことを言い、……そのほかあらゆる罪悪を犯すようになっている。」(ヒラマン13:22)

繁栄下であって多くの人が信仰を保ちまた強めることさえできるのは確かであるが、繁栄と信仰を失うこととの関係については、余りに多くの例があり無視することができない。ニーファイ人の歴史は不吉なことを予期させる。最初に人々は信仰と勤勉によって主に仕え、生活する人々は努力のゆえに恵みを与えられ、繁栄する。しかし、労働の結んだ実により、人々は高慢、虚栄、独善に陥り、その結果繁栄をもたらすもとなった信仰さえも失い始めるのである。この過程が一世代のうちに行なわれることがある。またある時には二世代目、三世代目が物質的に豊かであることから来る誘惑に屈服している。

物質的な繁栄に内在する第三番目の危険は、人間としての必要なことや悩みに鈍感になる傾向である。全般的に繁栄し

繁栄の考察

ている時期にあって、それが現代であれモルモン経の時代であろうと、すべての人々が繁栄の恵みを受けているのではない。必ず何かの理由で助けを必要としている人々がいるものである。モルモン経には、繁栄の結果、憐み、同情、慈愛、無私などの特性が侵されていったことの例が多く記されている。我々は物質的に恵まれたり、衣食類に恵まれると、恵まれていない人々を見つけたり、助けたりしなくなるものである。アルマは人々の中にこの傾向があるのに気づいていた。

「かれはまた人民相互の間に非常な不平等があつて、ある者は甚しく傲慢になってほかの者をいやしみ、貧しい者や着物のない者や飢えている者や渴いている者や病氣をしている者や悩んでいる者をかえりみないことを認めた。」(アルマ 4 : 12)

人の必要や悩みに対して憐みの気持ちからそれに応えることは、イエス・キリストの福音の根本である。これを償い得るものはない。死を前にしたモロナイは、恐らく我々をも含んだ将来の世代が非常に豊かな生活を送ることを知っていた。またニーファイ人の間で度々起こったように、繁栄のためにある者は他人の必要としていることに鈍感になることも予見していた。将来の世代に関してモロナイの記した言葉は我々繁栄下にある世代の上に重々しくのしかかってくるに違いない。

「ごらん、あなたたちは金銭と自分の財産と自分の華やかな衣と自分の教会の華やかな飾り物とを、貧しい人々、病氣の人々および悩んでいる人々よりも愛するのである。なぜあなたたちは生命のない物を自分の身に飾りながら、飢えている者、貧しい者、はだかである者、病んでいる者また悩んでいる者たちがあなたたちの前を通り過ぎて行くとき憐まないのか。」(モルモン 8 : 37, 39)

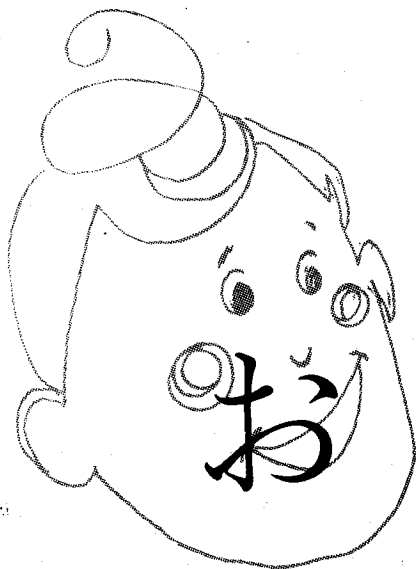
繁栄下にある世代はすべて、ニーファイ人の道徳的、霊的生活をしばしば損ったと同じ誘惑にかられるのである。物質的に豊かであるために、人生を唯物的に見るという結果を生むことがある。物質偏重主義に陥らないためにも、ニーファイ人の歴史を警鐘として大きく鳴らす必要がある。什分の一

と献金の原則は物質偏重主義へのへり石と考えることができる。規則正しく収入の十分の一を什分の一として支払い、教会、伝道活動の発展、我々の中の貧しい人の必要を満たし、できれば自活させるための援助としてその他の献金を支払うならば、我々はこの習慣により物質的な価値について正しい見方を持ち続けることができるに違いない。適度の楽しみを得ながら生活を維持するということが以前に、物質的な価値は道徳的、霊的、知的、社会的価値を養い、育成するための方法であると考えべきである。

我々は什分の一と献金を支払うことにより、財産や衣食類を蓄積するだけでなく、目的のために物質を使うべきことを学んでいる。正しい精神をもって什分の一を支払うならば、純然たる唯物的な目的以上の価値を養うために働かせ得ることがわかるようになるであろう。教育、伝道、良い音楽、公務への志願、立派な慈善行為のために使う金銭は、救いと結びつかない物質やつかの間の娯楽へのあくことのない追求と違って、福音に一致していることは間違いない。

今日の世界は繁栄を続けていると同時に、物質偏重主義への道を歩んでいる。たとえばテレビ広告の宣伝する立派な生活とは、物質的な財産をたくわえ、肉体的な楽しみをエンジョイすることだとしている。まんえんしている性的錯乱、幻覚剤の乱用、離婚はすなわち、物質的繁栄に対する我々の世代の弱点をさらけだしているといえよう。もし我々が以下の主の警告、訓戒に従って生活するならば、イエス・キリストの福音とモルモン経の教えは現代の物質偏重主義に対する強力な矯正手段になる。「富を求めずして智恵を求めよ。さらば見よ、神の奥義は開かれ、それより汝ら富める者とせらるべし。見よ、永遠の生命を有つ者は富めるなり。」(教義と聖約 6 : 7)

ジョン W. ベニオン博士は ロチェスターワード部 (ニューヨーク) の第一副監督をつとめ、同時にロチェスターのブリトン中央教育委員長でもある。以前にインディアナ大学教育学部で教鞭をとっていた。



こ

ブレイン N. リー

常

に教室内で問題となるものに、生徒の不法とそれを正すためのしつけの方法がある。問題を起こす生徒を抑え教室内の秩序を保つための手段として、権威をかさにきたり、おどかしや体罰を加えることがよくある。この方法をとる教師の多くは、結果が即座に現われることを知っている。つまり、授業の邪魔をする生徒を教室から出せば、その生徒が原因となっていた妨害はたいいなくなる。結果がすぐ目に見えるため、私たちは軽い気持ちでこの方法をとる。しかし、この問題の生徒は、教室に戻されれば再び同じ妨害を始めるのである。

結果がすぐに現われ、しかもあまり努力を必要としないために、この方法は非常に魅力的である。しかし、クラスの秩序を保つのにほんの少ししか効果がなく、せいぜい少しの間態度を変えさせるぐらいしかできないとしたら、この方法はほんとうに価値があるのだろうか。不法な生徒に対する関心は、日曜学校が終わった後も続くだろうか。

不法の理由

生徒が不法を働くには多くの理由がある。またどんな理想的な授業でも不法の理由となるものがある。それは、教師、環境、生徒自身のいずれかによる。教師の場合は、準備不足や神経質、不慣れ、御霊のない時がそれである。教室がせますぎたり、暑すぎたり、寒すぎたりしてもその原因となる。教材が不十分だったり、他の生徒が話していることも同様である。生徒の側にあげられる原因としては、空腹や体の不調、疲れ、興味がなくなること、批判的な性格、やかましいこと、眠けなどがある。

このような状態では、レッスンに集中しようとしても確かに無理である。しかし、以上の状態があっても、生徒が授業に対する自分の責任を理解した時には、授業がうまくいっているのである。どんな状況であれ、自分の行動は自分の責任である。

な い と

責任と選び——永遠の原則

ウィルフォード・ウッドラフは、私たちの責任について次のように言っている。

自由意志と神に対する個人の責任は、当教会の教義にあって本質をなすものである。¹

人間の権利に関して、私は過去の神権時代と同様この神権時代においても、神がすべての子供たちに個人の意志を与えたもうていると申しあげたい。神の支配と管理のもとに、この意志は人にゆずりとして与えられている。この意志により我々人類はすべて責任ある存在となり、肉体にあって我々の選ぶ道、生活、行ないに対して責任をもつのである。²

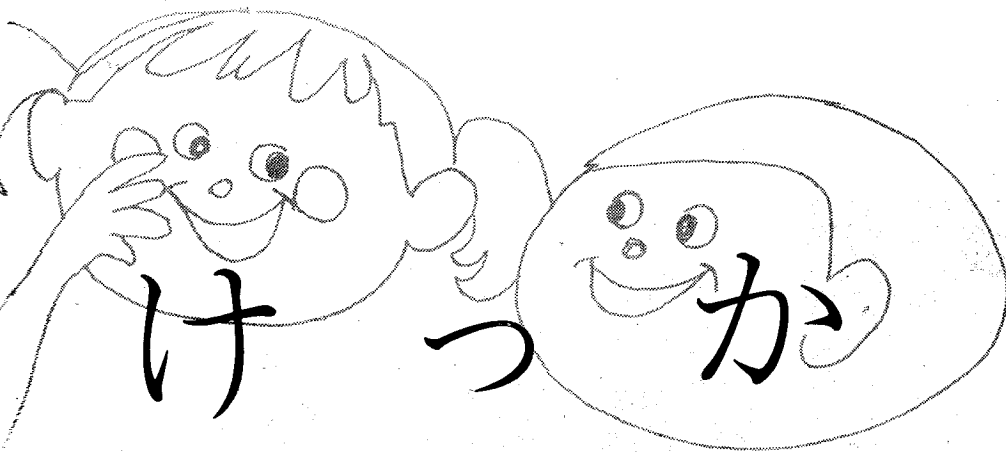
それゆえ、私たちには自分の「行ない」に対して責任がある。この自分の行ないに対する責任をとるということは、行ないの結果に対しても責任をもつことである。そして望むと望まざるとにかかわらず、永遠の律法により私たちは行動の結果を受けることになる。私たちが行動を決定する時に、この過程を知っていれば有利である。すべて律法を破れば「正義は人に要求して律法をきびしく行ない」(アルマ 42:22) また律法を守ればそれは祝福をもたらす。なぜなら、「そもそも創世の以前より天に於て定められた一つの変わらない律法ありて、あらゆる祝福はこれに基く」からである。(教義と聖約 130:20)

この世にある自然の法則もこれと似ている。食べ過ぎると太るし、がけから飛べば体は落下する。また息をしなければ死んでしまう。すべてこれらの結果は、生命に関する自然の律法を破るか従うかによって決まる。

同様に、神の律法を破るにしても守るにしても、我々はその報いを受けるのである。

不正の支配とそれを避ける方法

これは日曜学校またしつけとどんな関係があるのだろうか



か。これまで、教室内で生徒がする不作法なふるまいを解決するため、教室から出したりおどかしたりという、一般的にとられている方法について論じてきた。この方法は、創世の以前に天上の会議で示された第二の方法を思わせる。サタンが提案した不作法を抑える方法は、不作法なふるまいを許さないと徹底したものであった。主の提案は、あくまで人の自由意志を犯さず、もし人が自由意志を使って選ぶのなら不作法も許すことだった。今日、程度の差はあれ権威を与えている者はすべて、これら二つの方法のうちどちらが他人との相互関係をよくする基となるかを決めねばならない。一つの計画は自分の選びの結果から学ぶ機会があり、もう一つはしいられた結果を受け、個人の意志を許さないものである。生徒に向かって「静かにしなさい。さもないと監督のところへ連れて行きますよ。」あるいは「教室で話をしないように言ったでしょう。おもてに出ていなさい。」と言った場合、教師はどちらの方法をとっているだろうか。

生徒の意志を尊重しようとする方法もある。教師は生徒に次のようなことをしたいと思うのがこの方法である。

第一に、教室内でするあらゆる行為の結果を生徒に認識させること。賢明な教師は、行動の結果が自分と他人に与える影響を生徒に知らせようとするものである。よく聞いてレッスンに参加していれば、内容を理解できるが、人の邪魔をすれば授業はできなくなってしまう。そして福音を学ばなければ、将来伝道に出るとが教師になるという機会を失うのである。

第二に、教師は、生徒に正しい行為を選ぶ機会を与えること。「正しい」とは、生徒が心から望む結果をもたらす行為を言う。その一つの方法として、生徒自身にクラスの標準を作らせる。こうすると、生徒は自分たちが本当に必要としているものが何か、そのために何をしなければならないかを決める。クラスの標準に従わない生徒が出てきた時に教師の果たす役目は、彼らのふるまいの結果がどうなるかを、生徒自身にわからせることである。

たとえば、クラスで福音を学ぼうと決めたとする。福音を

学ぶには、生徒は日曜学校に出席し、レッスンに出て人の邪魔をしないようにしなければならない。一人でも妨害する人がいたら勉強はできない。そこで、もしだれかがいつも授業の邪魔をするようだったら、クラスの人々が二人で、迷惑になっていることを皆のいない所で説明するように決める。これが邪魔をした生徒に与えられる結果である。（それでもまだ妨害が続けられるようだったら、もう少しきつい結果が与えられる。）この場合、生徒たちは次の三つの点で意志を行使していることになる。それは日曜学校から何を得るかを計画し、クラスを管理するための方法を決め、そしてクラスの標準を受け入れたことである。何週間か経てある生徒がクラスの邪魔をしたら、その時は自分でもよく承知している結果を受ける。そして彼が、これらの結果を受けたくないと思うなら、教師は再び繰り返さないようにさせる。恐れやおどかしは一切使わず、教師は「彼（生徒）の汝（教師）を敵視せざらんために、……その人に一層の愛を示す」のである。（教義と聖約121：43）

真の教育——愛ある行為

上に述べたことは、教室で不作法があった場合にとる一つの方法である。しかし、クラスで起こるいろいろな問題を即座に直す万能薬ではなく、むしろ生徒の自由意志を尊重する態度と方針をとるように勧め、授業の効果をさらに上げるためのものである。このためには、教師は表面的だけでなく、さらに深い関心を一人一人の生徒に対して示す必要がある。そしてこれは、生徒が感じとるものでなければならない。時間と努力、そして深い思慮と準備が必要かもしれない。しかしこれは生徒の心にかかわる問題であり、人の値は神の前に大いなるものなのである。³

1. ウイルフォード・ウッドラフ、ミレニアルスター 1889年12月12日
2. ウイルフォード・ウッドラフ、ミレニアルスター 1889年9月1日
3. 教義と聖約 18：10

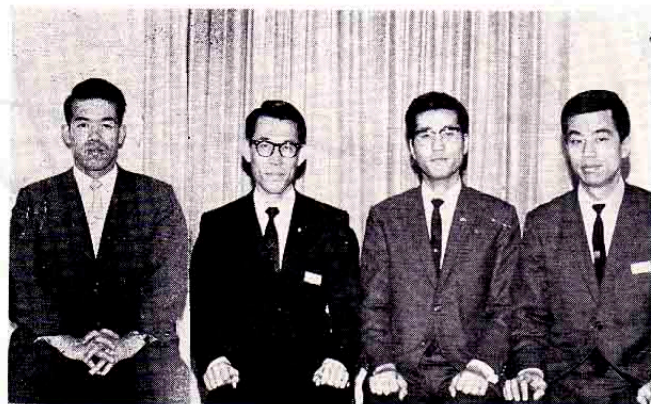
日本東伝道部だより

日本東伝道部長会



鮫島邦彦(1) 堀内伝道部長 柳沢俊雄(2)

北海道地方部長会



本間広(書) 平野地方部長 高杉保夫(1) 酒巻俊二(2)

北海道地方部大会開かる！

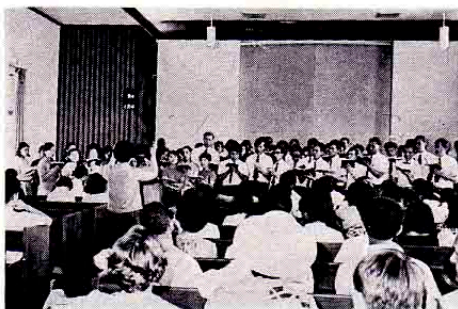
盛夏にもかかわらず、涼しい日本の最北の都、札幌で、北海道地方部大会が開かれ、堀内伝道部長のもとに、新しい組織が作られ、新しい役員が支持されました。主の御業はこの地でも大きく進められています。

札幌支部



宮本敏秀(書・補) 柴田直毅(書・統計)
菊地 敏(2) 佐藤支部長 泉谷 徹(1)

旭川支部コーラス



メルケゼデク神権者(長老)



塩 文彦(札幌) 坂東保幸(室蘭)

◆◆◆◆◆ 東北地方部だより ◆◆◆◆◆

仙台支部

建築現場での新支部長会



(1)早坂 (P)斉藤 (2)菅原
(S補)斉藤 (S)篠原

山形支部

青年支部長に助人。
支部開設以来初めて日本人による
支部長会が組織された。



(2)(S)高橋 (S補)佐藤
(1)柴田 (P)黄木

おめでとう

ございます

東北地方部YMMIA会長天野昭兄弟は帰
還宣教師安達郁子姉妹(札幌)と御結婚。



第 3 回

ユース・コンファレンス

第3回ユース・コンファレンスは8月6日～9日まで十二使徒のハワード W. ハンター長老、中央管理会長のフローレンス・ジャコブセン姉妹、第一副会長のマーガレット・ジャクセン姉妹を迎えて、盛大に開かれ、4日間にわたって二つの伝道部と一つのステーキ部より、のべ2,444人の若人が参加し、多彩な催し物が行なわれました。

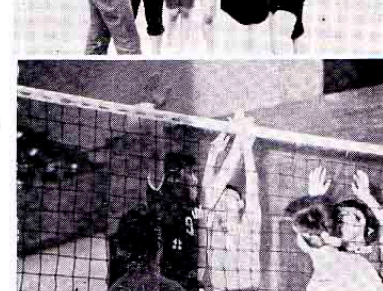
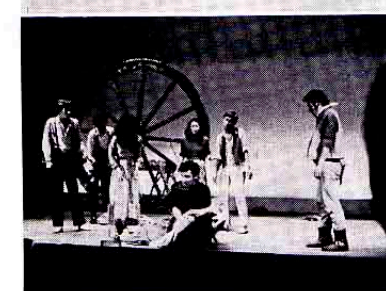
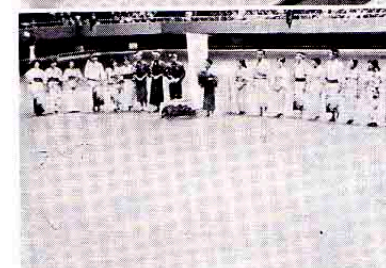
一日目は、駒沢体育館にて、壮観な開会式と、美しいマスフォークがあり、夜は、日本青年会館で、東北地方部と東京第2ワード部のすばらしいドラマが上演されました。

二日目、バレーボールの熱戦の末、男子は東京第3ワード部、女子は、東京第5ワード部に凱歌があがりました。

三日目、昼は自由参加のプログラム、夜は豪華ディナーと大ダンスパーティがダイヤモンドホテルで盛大に行なわれました。

四日目、東京第3ワード部礼拝堂で証詞会が行なわれ、終止、御霊の導きの中で193名の若人の力強い証詞が述べられ、この地における主の御国の発展を強く感じました。

このユース・コンファレンスのためによく計画し、指導して下さった方々に心から感謝し、讃辞をお贈り致します。



〔万博だより〕

皇太子殿下モルモンパビリオンを御訪問

去る7月31日（金）午後6時15分より約25分間皇太子殿下がモルモン館を御訪問されました。天皇家の御家族がモルモン教会を公式に訪問されますのは今回が初めてでございますので、私達教会にとって歴史的な出来事であり、大きな神の恵みでございました。

鈴木正三副伝道部長の“モルモンとは何か？”“モルモンは何を信じているか？”“モルモン教会と他の教会の違いは何か？”“実践の宗教とは？”“モルモンの歴史は？”等々の説明に対して一つ一つ丁寧にうなずかれる姿はとても感動的でした。

ハワイのテルヤ兄弟姉妹より心をこめて作り空輸して来たレイをブロックバンク長老のお嬢さんが皇太子殿下に贈られ約200人の会員の見守りの中に無事訪問を終えられました。



皇太子殿下にハワイよりのレイを贈る



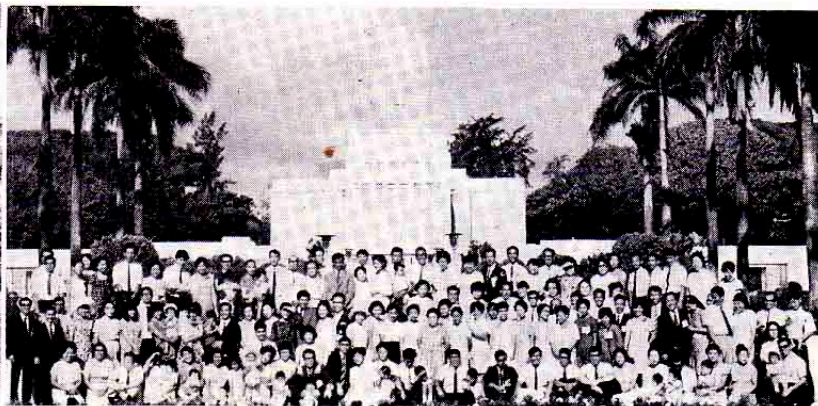
鈴木兄弟の説明を聞かれる皇太子殿下

〔ハワイ神殿訪問〕

写真上、沖縄の聖徒たち 写真下、韓国伝道部の聖徒たち



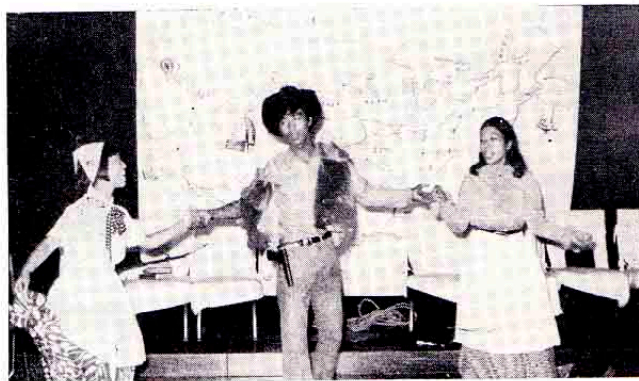
去る8月1日（土）パン・アメリカン、チャーター機にて大阪国際空港より150名の日本人聖徒及び12名の韓国人聖徒と、その家族がハワイ空港に到着。現地の会員の大歓迎を受けました。一行は予定されたすべての儀式をすませ118人の祝福師の祝福をいただき大きな成果を得て8月12日（水）無事大阪国際空港に到着致しました。一行はこの日本の地に神の王国を強く大きく打ち立てるとの約束と誓いを心に秘めて、それぞれの地に分れて行きました。私達のこのプログラムを成功させるために計り知れない努力と愛と献身を示して下さいました神殿長をはじめ、ハワイの聖徒の皆様は心より深く深く感謝致します。又神様の大きな導びきと恵みを決して忘れることが出来ません。



南国だより ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

日本西部伝道部の聖徒達は、主の御前によき実を結び、心の清き者のためのシオンを建設した初期の聖徒たちの信仰と忍耐強さと勇気を称え、その開拓者精神を、心にとめながら1877年の開拓者達のソルトレーク盆地到着を記念して記念祭を行いました。

初期の聖徒達と同じように現代の開拓者—私たち—も又、この地がシオンの一部としてよき実を結ぶように、何であっても徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは、褒むべきことがあるならば、これらをさがし求めているのです。



「夢 の 旅」

福岡支部の重富ふみ子姉妹が世界青年貢献協会の大会に日本の特別代表の一人として参加するために選ばれ、日本からの86人の若者達と一緒に1ヶ月間他の国々から来た多くの協会員たちと、教育方法や教育体系について、意見の交換をするためにアメリカへ出発しました。

重富姉妹は教会員となって6ヶ月ですが、現在大学で幼児教育を専攻。渡米の資格を得るために文部省と外務省の2つのテストを受けてそれにパスしたのです。

彼女が特に訪問したい所はソルトレーク神殿で、その他できるだけ多くのモルモンの家族と会いたいということです。彼女は、現在7人の家族のうちの、ただ一人の教会員ですが、彼女が教会に行くことに対して「家族の者は、とってもよく理解して協力してくれる」と言っています。

いつか彼女の系図について尋ねたとき、彼女は、家族の記録が代々、非常に注意深く保存されており、彼女の祖先の多くはサムライ（武士）であったこと、また家宝として700年伝来の刀があることなど話してくれました。

彼女は「渡米の機会が本当に祝福されたもので、子供時代の夢の実現として大事にしたいし、何しろ『とっても素敵です』と言っています。」



いくつかの支部の
会員達は安息日の
朝早く、聖典から
学ぶため「早朝勉
強会」に集まりま
す。



“モルモン・トリオ”

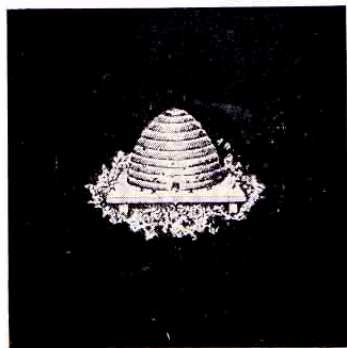
去る6月13日(土)特別ラジオ放送番組に出演し、多くのフォークソングを歌い、モルモン主義について語った彼らは、そのすばらしいタレントをもっとたくさん公開してほしいと頼まれた。

植村秀子姉妹

ローズ・メイ・ファール姉妹

長浜俊生兄弟

(モルモン・トリオ)



方向を変えなければ

リチャード L. エバンズ

「直線は、2点間の最短距離」という公理がある。それをいくらか変えてこう言うことができよう。方向を変えなければ、我々は今向かっている所へ到着するのだと。各個人に、団体に、社会や国家に、そのことはあてはまる。我々が方向を変えなければ、今行こうとしている所へいつかは必ず行きつくのである。例をあげよう。もし今借金を重ねているとしたら、我々が方向を変えない限り、日毎にますます借金はかさむ。またもし健康や幸福な生活をむしばむ何事かを今行なっているとしたら、方向を変えない限り、必ず健康がそこなわれ、不幸に見舞われる。愛する人々との人間関係が、もし今悪ければ、また結婚生活の幸せが次第に失われていくならば、あるいは家庭内の幸福が少しずつ小さくなっていくならば、我々は真心をもって自分自身をみつめ直し、自分やまわりの人々に失望する前に、何がそうさせているか、自分のどこがよくないのかを知らなくてはならない。もし自分を偽ったり、いくらかでも不正直であったり、他人のものをとったり、律法を犯したり、不誠実であったり、真心から正直な日々を送っていないならば、そしてその方向へ進み続けるならば、我々は当然それらの行きつく場所へ行きつくのである。学ぶという労を費さず、良いことに従おうとしないならば、知るべきことを充分知らないまま、行きつく所まで行ってしまふ。我々のうちには、いずれ何かが起こり、違った道が開けるだろうという望みをもって生活する人々がある。我々の外部のことについてはそういうこともある。だが、もし他人が我々にすべての機会を提供してくれるとしても、我々自身の中に進んで学びとろうとする心、悔い改め、改善しようとする意志がなくてはならない。変わるための方法は、変えることである。悔い改めるための道は、以前の習慣から離れること、方向を変え、正しい道へと転換することである。もし方向を変えなければ、我々は今向かっている場所へ必ず行きつくのである。

聖徒の道

1970年9月20日発行

振替口座 東京16226番

発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス

発行所 東京都港区南麻布5-8-10

末日聖徒イエス・キリスト教会 電話(442)7459

印刷所 太陽印刷工業株式会社

定価 100円

予約 一年間1,000円(外国4ドル50セント)

電報受信略号 「トウキョウ」 マツジツ